

実習指導における  
実習施設と大学の連携に関する研究

平成16年～18年度 長野県看護大学特別研究

成果報告書

平成19年3月

研究代表者 唐澤 由美子

(長野県看護大学 看護学部)

## はしがき

この研究成果報告書は平成 16-18 年度の 3 年間にわたり、「実習指導における実習施設と大学の連携に関する研究」を課題とした長野県看護大学特別研究費補助金の交付を受けて行った研究の報告書である。

### 【研究組織】

研究代表者：唐澤由美子(基礎看護学 助教授)

共同研究者：中村恵(基礎看護学 助手)

武田貴美子(成人看護学 助手)

曾根千賀子(老年看護学 助手)

岩崎朗子(看護教育学 講師)平成 17-18 年度

### 【研究経費(予算)】

平成 16 年度 312 千円

平成 17 年度 400 千円

平成 18 年度 342 千円

---

計 1,054 千円

### 【年度計画】

平成 16 年度 県内にある本学の実習施設 5 病院の看護職者への質問紙調査を実施した。

平成 17 年度 県内の病院附属看護専門学校教員への質問紙調査を実施した。

平成 18 年度 本学と実習病院との関係作りのための方策の検討をし、それを実施した。

### 【学会発表】

- 1) 唐澤由美子・中村恵・武田貴美子・曾根千賀子・岩崎朗子(2006)：病院と学校との良好な関係づくりのために教員が行う実習病棟での活動. 第 16 回日本看護学教育学会講演集, 149.
- 2) 曾根千賀子・唐澤由美子・武田貴美子・岩崎朗子・中村恵 (2006)：病院と病院附属看護専門学校との人事交流－実習病院と学校との関係づくりへの示唆－. 第 26 回日本看護科学学会講演集, 258.

# 目 次

はしがき

はじめに ..... 1

I 実習病院の看護職者への調査 ..... 2

II 病院附属看護専門学校の教員への調査 ..... 10

III 本学と実習施設との連携のための試み ..... 19

おわりに ..... 22

## 資料

学会発表の抄録とポスター原稿 ..... 23

平成 18 年度長野県看護大学研究集会抄録・発表スライド ..... 29

実習病院の看護職者への調査の依頼文と調査用紙 ..... 33

調査結果報告資料(協力病院へ結果として示した資料) ..... 38

病院附属看護専門学校の教員への調査依頼文と調査用紙 ..... 43

看護サマーセミナーチラシ ..... 46

## はじめに

看護学実習は学生の看護実践能力を高める上で、大変重要な授業であり、効果的に展開できることがのぞまれる。そのために必要なのは、大学と実習施設間の交流と柔軟な協力体制である。大学と実習施設が同じ設置主体である場合、ユニフィケーションという体制で連携をしているところもある（小松 1996、森内ほか 2005、佐藤ほか 2005）。しかし、本学の場合、設置が同じ施設での実習は非常に少なく、人事交流もなく、情報交換の場も非常に少ない。現在行われていることとしては、実習を担当する教員（助手）が実習直前に実習施設との調整や情報交換を行って実習に入り、実習環境を整えていることが主な活動である。また、実習が終わった後、学生の評価や指導の反省などのまとめの意味で話し合いをすることがあげられる。さほど多くの機会があるとは言えない。

そこで本研究では、実習施設と大学がもっと密接な関係を形成することをめざし、現状の問題点の明確化、対応策の検討を行い、いくつかの対応策を実施することを目的に研究に取り組んだ。

3年間の研究活動の概略を紹介すると、初年度は、実習施設と本学との関係がどうなっているのか、本学が実習施設の看護職からどう見えるのかについて明らかにすることを目的にして調査を行った。対象は、本学が実習病院としている5施設の看護管理者、看護師(実習指導者を含む)である。

2年目は、本学と実習施設の間に物理的にも精神的にも距離感があることがわかったので、密接な関係をつくるためにはより具体的な方策を考える必要があると判断した。そして、そのための示唆を得ることを目的にして、A県内の病院附属看護専門学校の教員を対象とし、どのような機会を使って病院職員と人事交流を図っているか、実習を円滑に行う上で人事交流は必要なのかについて調査を行った。2つの調査結果をふまえ、最終年度は、本学で行える対応策について検討し、いくつか試行してみた。また、前年度の調査結果を看護系の学会で報告を行った。

なお、本学が実習施設としているのは、医療機関をはじめ助産所、介護老人保健施設、市町村役場、保健所、保育園、学校、保健・福祉センターなど多岐にわたっているが、今回は、医療機関である病院との関係作りに焦点を当てて研究を行った。

## I 実習病院の看護職者への調査

本学が実習施設としている場所は本当に規模も機能もさまざまである。各看護領域の実習目標を達成するために適した施設を選択し、ご協力をいただいている。

この調査では、実習施設の中で、本学の多くの学生の実習を受け入れて下さっている 5 病院に絞り、実習指導者のみならず、病院に所属しているスタッフナースや看護管理者も含めた看護職者が本学に対してどのような印象を持っているか、また、期待を持っているかなどの内容の意識調査をすることにした。その理由は、関係をつくる上で、まず、実習施設の看護職者が本学や本学の教員に対してどのように思っているのか現状を把握することが重要であると考えたからである。

### 1. 目的

実習施設の看護職者が本学に対してどのような印象や期待をもっているか、臨床の立場からニーズを明らかにして、今後の実習施設と本学との連携に役立てることである。

### 2. 方法

#### 1) 対象

本学の実習病院となっている 5 病院の看護管理者を含む看護職者 477 名。

#### 2) 調査時期

2005 年 2 月

#### 3) 調査方法

自作の質問紙を用いた郵送法による。

#### 4) 調査内容

①看護職者の個人属性、②教員（実習指導を行っている）の受け止め方と教員への要望、③大学への関心、④大学の印象の 4 項目である。

#### 5) 調査の手続き

実習病院 5 施設の看護部長に対して、事前に文書によって調査依頼を行い、内諾を得た。その後、質問紙を配付することが可能な看護職者数を把握し、人数分の質問紙を各施設の調査の受け入れ担当者宛で一括送付し、各看護師への配付を一任した。質問紙の回収については、看護師が個々に調査協力についての判断をした上で返送できるように、調査依頼

文書に研究の主旨の説明と同時に承諾の可否等の倫理的配慮について十分説明する文面を添えた。調査への協力の意思は、質問紙の返送があったことにより同意されたとみなした。

### 6) 分析方法

数値データについては、記述統計を中心に解析を行い、自由記述については、記述の内容をそのままデータとして扱い、データの類似性にて内容を分類しカテゴリー化した。

## 3. 結果

質問紙の回収状況は、269部(回収率56.4%)で、一部のみの回答などの不備のある回答用紙を除いたため有効回答数は230部(有効回答率85.5%)であった。

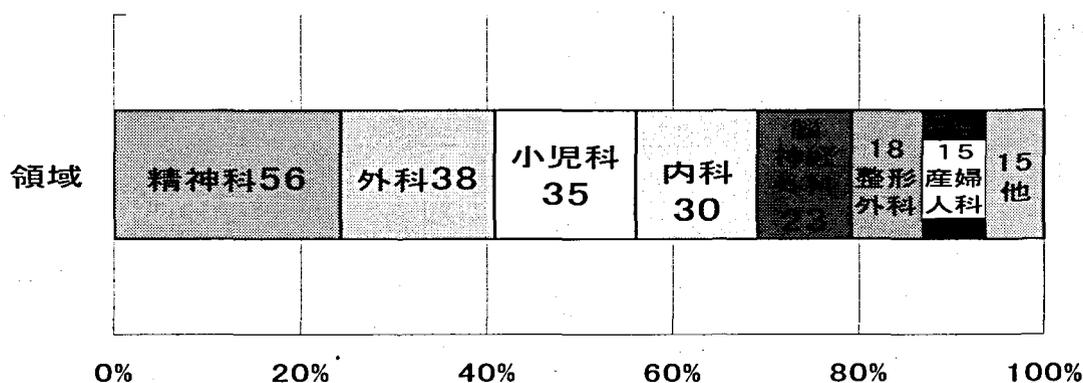
### 1) 対象者の背景

回答者の平均年齢は35.7歳(SD=8.6)で、平均臨床経験年数は12.6歳(SD=8.2)年で、1年未満から36年と幅広かった。

現在の役職は、151人(65.7%)がスタッフナースで、実習指導者が25人(10.9%)、主任・係長が22人(9.6%)、師長・副師長が10.4%であった。

主な領域は精神科が最も多く56人(24.4%)、続いて外科が38人(16.5%)、小児科35人(15.2%)、内科30人(13.0%)、脳神経外科23人(10.0%)であった。

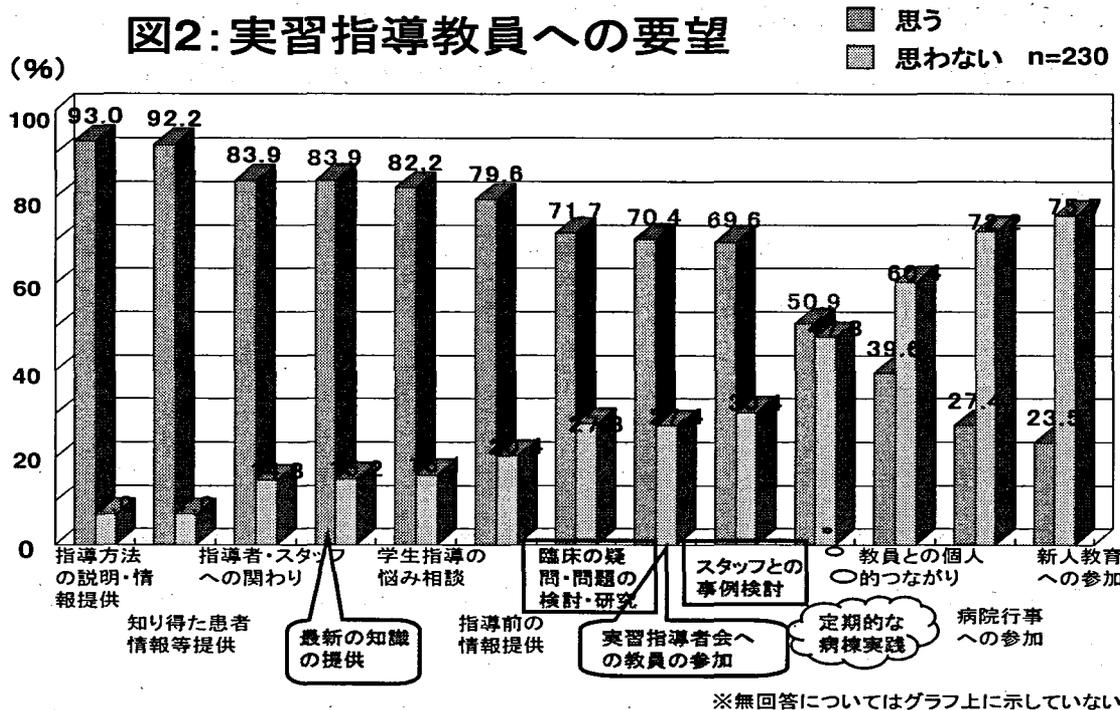
図1 所属している領域 (n=230)



### 2) 実習指導教員への要望

図2のとおり、実習指導を担当している教員への要望について尋ねたところ、実習指導の方法についての説明や情報提供をする(93.0%)、知り得た患者情報・看護について情報提供する(92.2%)、実習指導者やスタッフの学生への関わりについて助言する(83.9%)、実習指

導者への学生指導に関する悩み相談にのる(82.2%)などの「実習指導」に関する項目はどの項目も高く、80-90%であった。一方、実習病院の行事への参加(27.4%)や新人看護師の教育(23.5%)など「病院内の活動」についての要望は低かった。



### 3) 実習指導教員の実施の程度

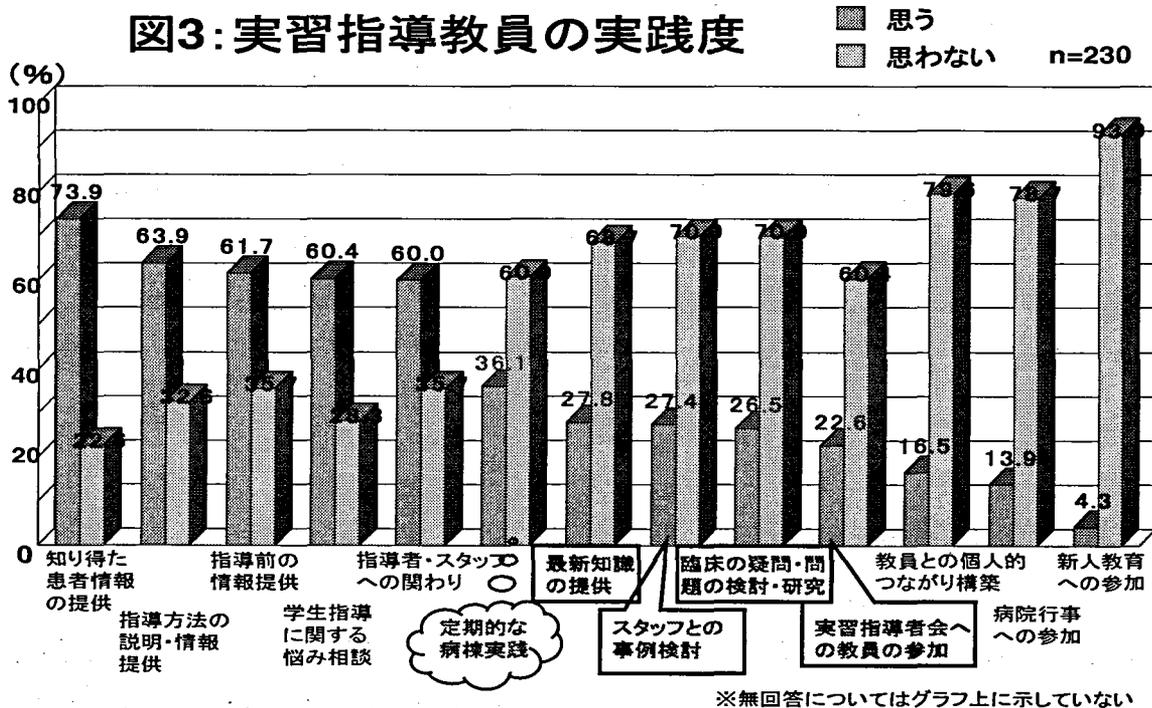


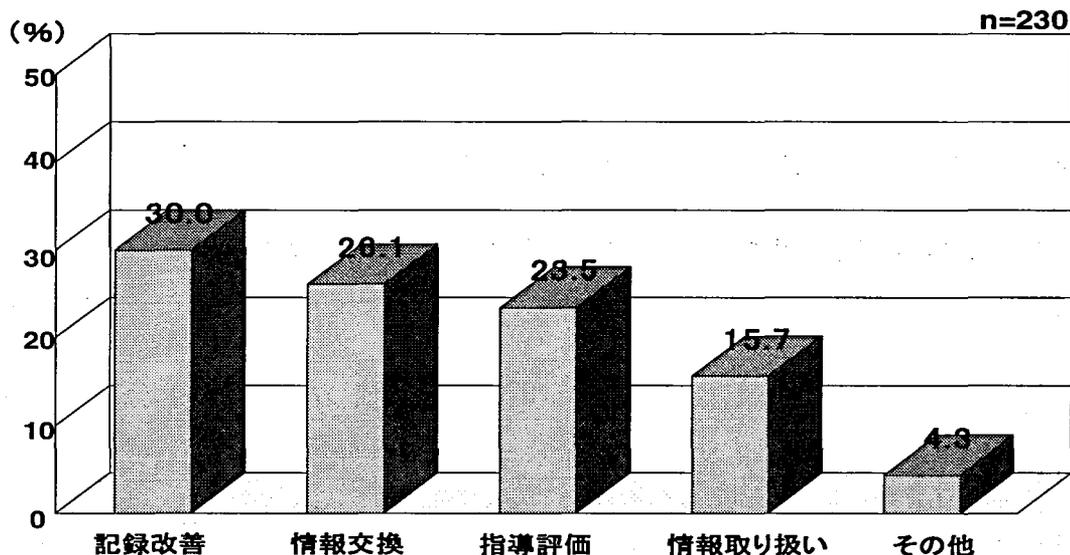
図3の通り、実習指導を担当している教員が実際に実施しているかその程度を尋ねたところ、要望の程度に比べ全体に低い割合になった。しかし、知り得た患者情報・看護について情報提供する(73.9%)、実習指導の方法についての説明や情報提供をする(63.9%)、指導に入る前に大学や学生の情報を提供する(61.7%)、実習指導者への学生指導に関する悩み相談にのる(60.4%)、実習指導者やスタッフの学生への関わりについて助言する(60.0%)などの「実習指導」に関する項目については、60-70%程度実施しているという回答であった。

看護職者からの要望が比較的高く、教員の実施度が低い項目には「看護に関する最新の知識の提供」「スタッフと一緒にケアについての事例検討を行う」「臨床での疑問・問題について一緒に検討、研究を行う」「実習病院での実習指導者会への参加」などがあげられた。

#### 4) 教員と共に解決したい臨床上的問題

図4の通り、看護職者が大学教員と共に解決したい臨床上的問題・疑問については「看護記録の改善」69人(30.0%)、「他施設の看護や実習指導などの情報交換」60人(26.1%)、「実習指導の評価や指導者の評価」54人(23.5%)などがあげられた。

**図4: 大学教員とともに解決したい疑問・問題**



※ 疑問・問題が「ある」と回答した割合を示す

### 5) 大学への関心

図5の通り、大学への興味・関心について尋ねたところ、最も関心が高い項目として「大学図書館の土曜日開放を活用してみたい」「関心がある」89人(38.7%)、「ややある」89人(38.7%)であり、続いて「大学が主催している公開講座へ参加したい」「関心がある」65人(28.3%)、「ややある」118人(51.3%)であった。「大学の授業に参加してみたい」については「関心がある」52人(22.6%)、「ややある」100人(43.5%)であった。一方で、興味・関心が低い項目には「学部・大学院への入学について相談したい」「教員と個人的に話してみたい」「科目等履修生制度を活用してみたい」であった。

図5 大学への興味・関心 (n=230)

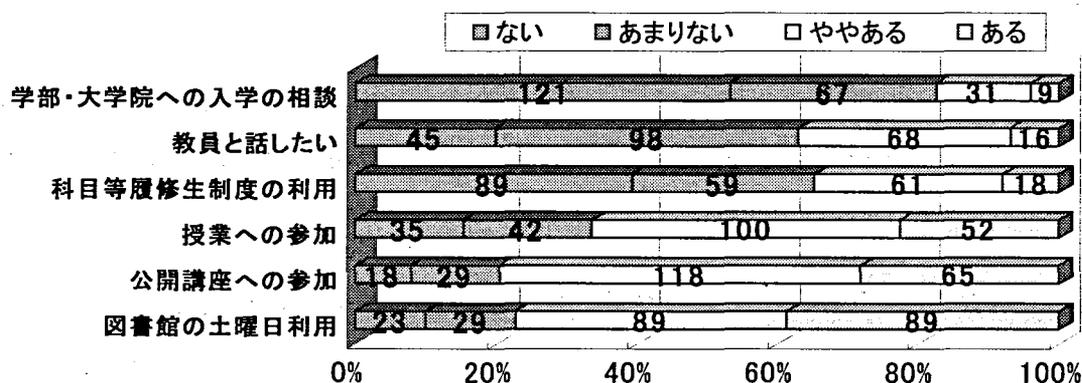
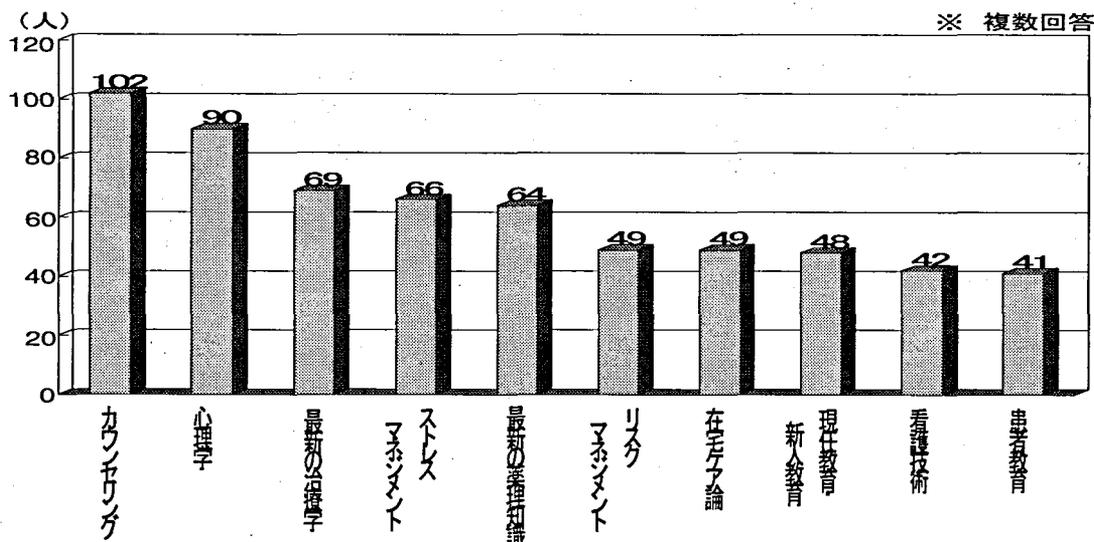


図6は大学で受けてみたい授業について尋ねた結果である。

図6 大学で受けてみたい授業内容 (上位10項目)



その結果、「カウンセリング」の指摘が最も多く102人、続いて「心理学」90人、「最新の治療学」69人、「ストレスマネジメント」66人、「最新の薬理の知識」64人であった。

## 6) 大学の印象

看護職者からみた大学の印象について尋ねたところ、図7の通り、「大学へ行ったことがないので何となく不安」が“思わない”75人(32.6%)、“あまり思わない”76人(33.0%)、「大学との距離が遠くなかなか行けない」が“思わない”70人(30.4%)、“あまり思わない”70人(30.4%)であり、大学への行きづらさはどちらかというところ“行きづらくない”と受けとめているようである。ただ、「大学の情報が目に触れるところがない」が“そう思う”61人(26.5%)、“やや思う”105人(45.7%)、「わざわざ大学に行くのは面倒」が“そう思う”53人(23.0%)、“やや思う”85人(37.0%)であり、大学の情報が看護職の手元に届いておらず、わざわざ行くのは面倒だと受けとめていることがわかる。

図7 大学の印象(その1) n=230

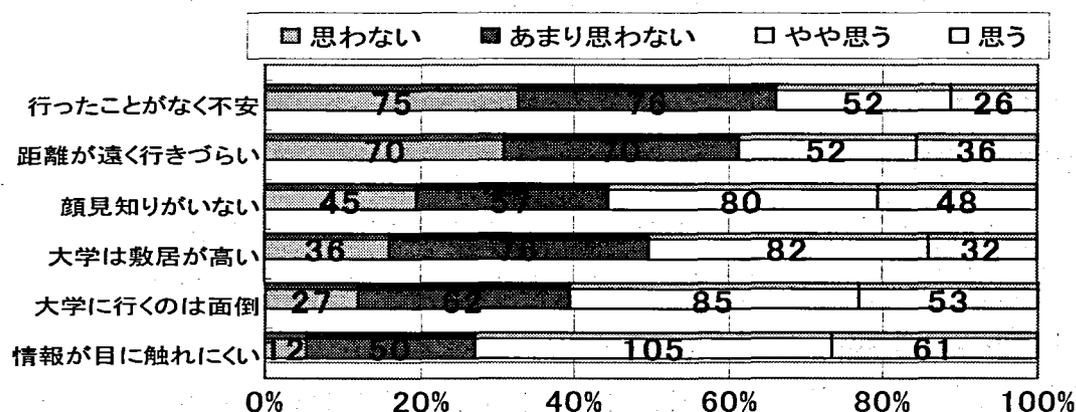
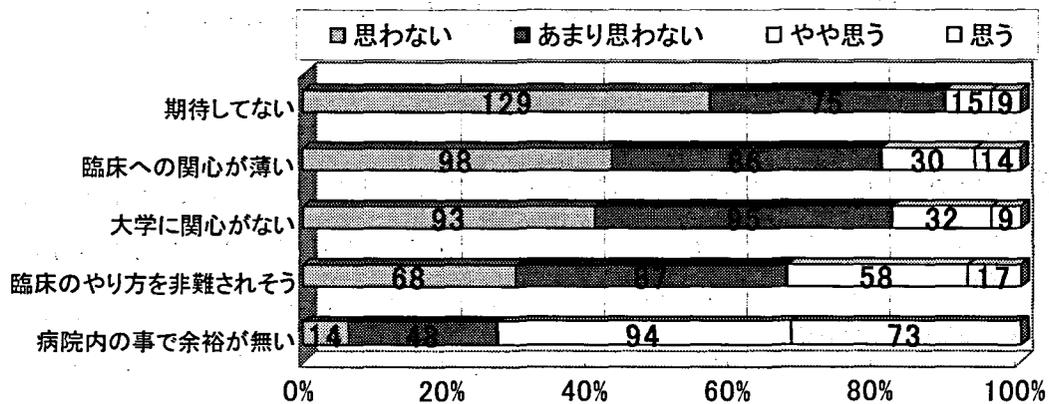


図8では、「大学・教員に期待していない」の問いに対して“思わない”129人(56.1%)、“あまり思わない”75人(32.6%)、「大学・教員は臨床への関心が薄い」の問いに対して“思わない”98人(42.6%)、“あまり思わない”86人(37.4%)、「大学に関心がない」の問いに対して“思わない”93人(40.4%)、“あまり思わない”95人(41.3%)であった。一方、「病院内の研修が忙しく、大学が提供するものまで手を出す余裕がない」に対して“そう思う”73人(31.7%)、“やや思う”94人(40.9%)であった。このことから、大学および教員に対する印象として、看護職者は関心が薄く期待していないわけではなく、むしろ、病院内の研修が忙しく大学が提供することにまで手が回らない、余裕がないとしていた。

図8 大学の印象(その2) n=230



#### 4. 考察

以上の調査結果から、以下の2点について考察する。

##### 1) 実習指導を担当する教員に対しての期待と現実

実習指導教員に対する要望の主なものは、「実習指導の方法や情報提供」であった。これらについては、学生の実習が行われている最中のみならず、実習に入る前に実習施設で研修を実施していることもあり、これまでも教員が実施していることであった。しかし、実際に実習指導教員がどの程度実施しているのか尋ねてみると、実施度は6~7割と要望より2割程度低くなっていた。このことから推察されるのは、実習指導にあたって教員は、事前から情報の提供を行い、調整を行っているつもりではあるが、臨床の看護職者はもっと、教員に対して実施して欲しいと望んでいるということである。

また、教員への要望が比較的高く、教員の実施度が比較的低いという期待と現実のギャップが大きい項目には、「看護の最新知識の提供」「スタッフと一緒にケアについての事例検討を行う」「臨床での疑問・問題についてスタッフと一緒に検討・研究を行う」「病院の実習指導者会への教員の参加」であった。臨床の看護をよりよくしていくための活動への参加や看護を客観的に検討し直してみる機会や研究する機会を得ることを実習指導教員に対して望んでいることがわかる。このことは実習指導を通じて、病棟にたびたび出入りをし、病棟のことがわかっている教員であるからこそという関係であることから期待されているのではないだろうか。自分たちの看護実践を中にあるもの同士で検討し合っているにもかかわらずなかなか発展しないことも、病棟のことを知っている部外者である教員が第三者という立場から看護実践に対して意見を述べたり、一緒に研究したりすることは実践現場の看護職

者にとっては、客観視する貴重な機会になると思われる。そのような働きかけが本学の実習に関わる教員は期待されているのではないかと思われる。

また、近頃、教員の看護実践能力の低下が指摘されている（看護学教育ワークショップ報告書 1999、看護学教育在り方に関する検討会報告書 2002）が、実習指導教員に対する要望として「実習指導以外の定期的な病棟での看護実践」は看護職者の約半数ほどであり、予想していたほど高くはなかった。このことは、本学の教員の看護実践能力がある程度あるといえるのか、逆に教員には看護実践能力はあまり期待していないという臨床の看護職の意思の表れなのか、何とも判断しがたい。とはいえ、臨地実習指導体制の整備、基盤づくりの一つとして、「看護学は実践の科学であるので、教授・助教授・助手を含めて教員には、看護実践の能力が問われる。（中略）常に実践能力を向上させるシステムを作る必要がある。」と言われている（看護学教育在り方に関する検討会報告書 2002）。このことから、現在、本学には教員の臨床研修制度がつけられたところであるが、この制度が有効に活用されるように推進していく必要もあるだろう。

## 2) 大学への興味と関心

実習病院の看護職者が本学に対して興味・関心をもっていることとしては、「図書館の土曜日の利用」や「公開講座への参加」や「大学の授業への参加」など様々な場面を通じての情報の発信・提供であることがわかった。このような期待がされていることを自覚して、本学としてできることをこれからも十分に検討し推進していく必要がある。現在行われている公開講座には一般向けと看護職向けの両者があるが、このような提供方式は対象者を絞っており、看護職者の期待に応えるものであると思われる。今後は機会がもっと増える事が望まれる。

また、大学で受けてみたい授業としては「カウンセリング」「心理学」「ストレスマネジメント」などの精神・心理学的な要素が多い。おそらく看護の対象をより深く理解するための知識や技術を習得したいということとともに、現在の働く環境に対していかに看護職自身が自分のメンタルヘルスを維持していくかについても関心が高い事を指しているものと思われる。このような関心が高い内容について、公開講座やセミナーの機会を通じて本学が看護職者へ提供していけることが期待されていると思われる。

## II 病院附属看護専門学校の教員への調査

この調査に入る前に、各看護領域の講座の先生方に対して、「実習施設との連携を深めるための活動としてどのようなことを行っているか」について、聞き取りを行った。その結果、共通に上がったことは、実習前の準備の打ち合わせや教員の研修、実習終了後の反省会やまとめであった。この他には、施設が行う研修会の講師や看護研究での指導・助言、施設や南信地区での勉強会への参加などがあげられた。

これらの結果より、今後連携を深めるための方策を考える上での示唆を得るために、ある意味ユニフィケーションの体制を取っている病院附属の看護学校の先生方を対象として、特に、病院の職員のなかでも実習病棟の職員との関係作りのためにどのような活動を行っているのか、病院の職員との人事交流の機会はあるのかなどについて調査を行うことにした。

### 1. 目的

看護学実習をより充実させるためには、実習病院と学校との連携が重要であるといわれている。現在、連携に向けて実習調整会議、事例検討会など具体的な取り組みがされているが、関係づくりのために教員が行っている内容について具体的に示されている報告は少ない。今回、実習病院との良好な関係づくりのために教員が行っている活動を明らかにすることを目的とした。

### 2. 方法

#### 1) 対象

A県内の病院附属看護専門学校の勤務する教員全数(9施設、86人)。

#### 2) 調査時期

2006年1月25日～2月10日。

#### 3) 調査方法

自作の質問紙を郵送により施設ごと配付し、個別に返送してもらった。

#### 4) 調査の内容

①個人の属性、②病院と学校のつながり(人事交流の機会)、③教員の実習期間外の実習病棟への出入りと実習病棟で教員が行っていること④教員からみた実習病棟の状況である。

#### 5) 分析方法

数値データは記述統計を行い、自由記述に関しては内容分析を行った。

#### 6) 倫理的配慮

質問紙の配付に際して、研究の主旨の説明と協力依頼を文面に記し、協力は自由意志によること、質問紙は無記名であり返送は個人で行うこと、個人が特定できないよう収集したデータを取り扱うこと等について依頼文に明記し遵守した。

### 3. 結果

質問紙の回収数は 61 人で、回収率は 71.0% だった。有効回答数はそのうち 59 人だった。

#### 1) 教員の背景

教員経験年数は、1 年未満～20 年で、平均は 7.5 年(SD=5.2) であった。看護職の経験年数(教員経験除く)は、3 年～33 年で、平均 13.3 年(SD=6.5) であった。教員の教育背景は 45 人(79.0%)が専門学校卒業で、大学卒 7 人(12.3%)、大学院卒 1 人(1.8%)であった。

実習を担当している領域は、図のとおり基礎 21 人(35.6%)、成人 20 人(33.9%)が多く、老年 11 人(18.6%)、小児 11 人(18.6%)、地域・在宅 8 人(13.6%)、母性 7 人(11.9%)、精神 5 人(8.5%)であった。複数の領域を担当している教員は 20 人(33.9%)あり、基礎と成人を兼ねている人が 9 人と多かった。最も兼務が多い人は 4 領域(基礎、成人、地域・在宅、精神)を担当していた。

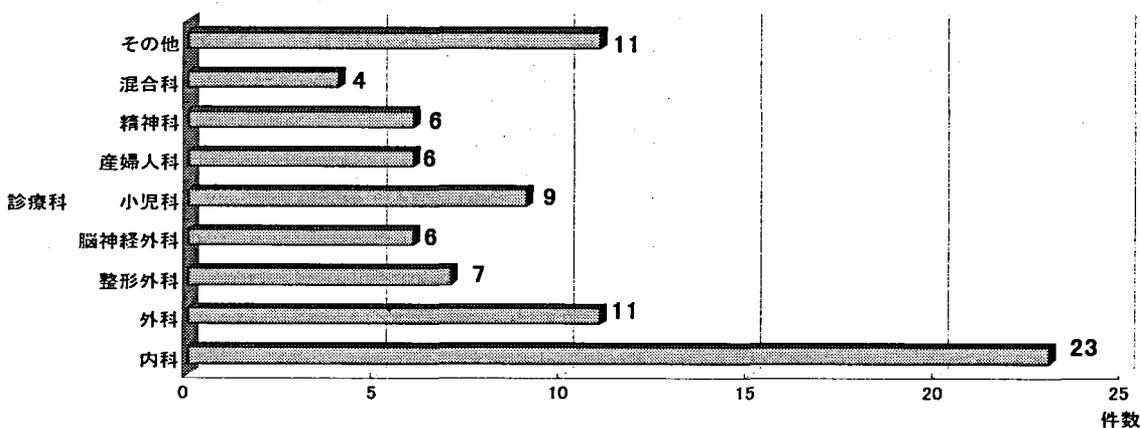
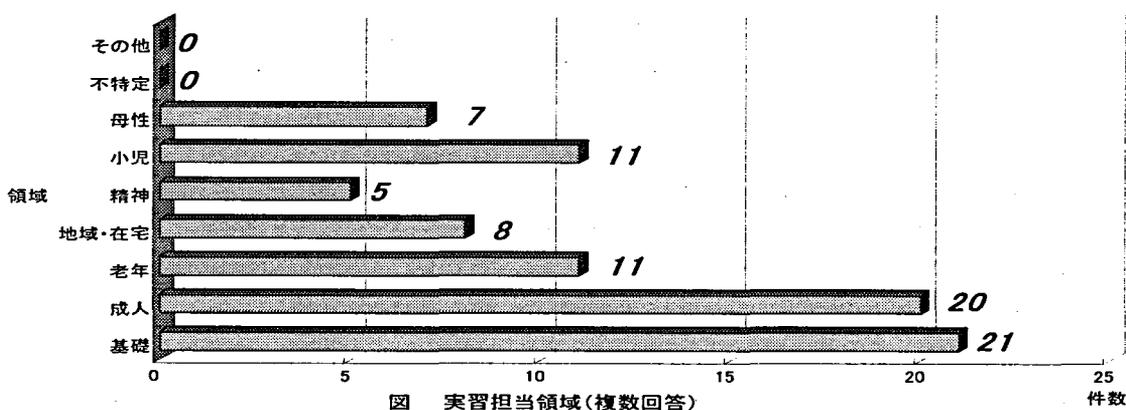


図 担当する実習病棟の主な診療科(複数回答)

11 件(18.6%)、小児科 9 件(15.3%)と続く。担当領域として基礎や成人が多いため、内科系外科系の病棟を担当する割合が高い。その他は、訪問看護ステーション、認知症病棟、

リハビリ病棟、決まっていないなどであった。

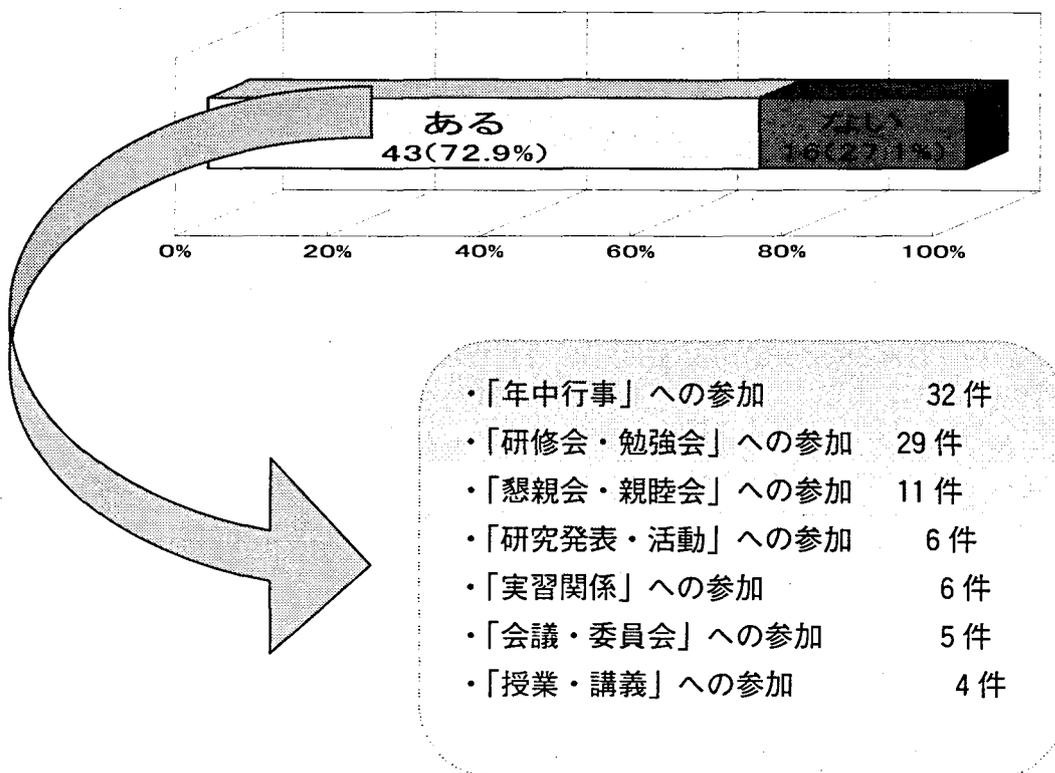
実習指導の体制は、「実習指導者が主導」は9人(15.5%)、「学校の教員が主導」は11人(19.0%)、「教員と実習指導者の両者で指導」は37人(63.8%)であった。

所属している病院の設置主体は、厚生連17人(32.1%)、日赤12人(22.6%)、県立9人(17.0%)、国立4人(7.6%)であった。

## 2) 病院と学校との人事交流

人事交流があるかどうか尋ねたところ、図の通り、「ある」が43人(72.9%)であった。人事交流の機会の具体的な内容について記述された内容を分類してみると、入学式・卒業式や病院際などの「年中行事」への参加が32件、講演・セミナー・病棟の学習会など「研修会・勉強会」への参加が29件と大変多く見られた。このほかに、新年会、旅行など「懇親会・親睦会」への参加が11件、「研究発表・研究活動」への参加が6件、実習報告会、実習指導者会など「実習関係」への参加6件と続いた。

図 人事交流の有無



病院と学校との人事交流が盛んになることを望むかどうか尋ねたところ、図の通り、「交流を望む」が54人(91.5%)であり、ほとんどの教員が人事交流を望んでいた。

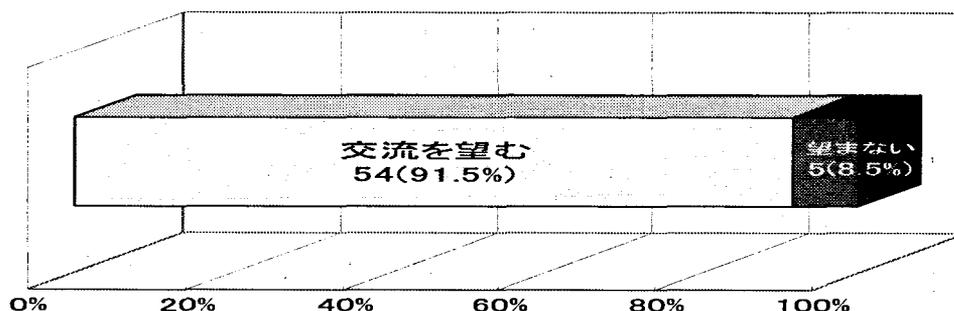


図 病院と学校との人事交流に対する意識 (n=59)

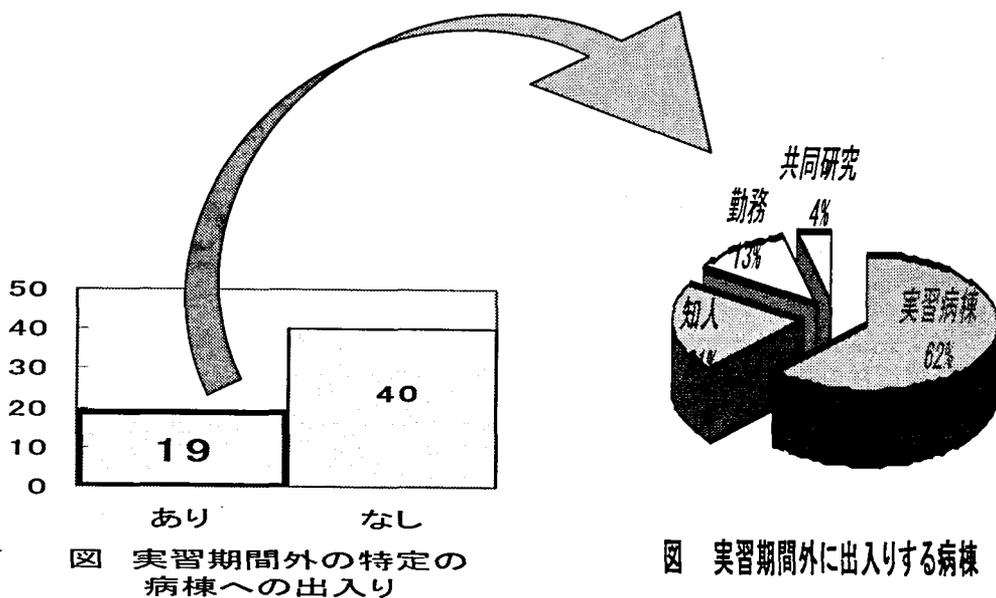
人事交流を望む理由について、自由記述で回答を求めた。その結果を内容分析によりまとめたものが表1である。64件の内容が抽出され、5つのカテゴリに整理することができた。

カテゴリをそれぞれ紹介していくと、ひとつは、教員も看護実践者として臨床の知識や技術を理解して学生に伝えていく必要があるからという「臨場感あふれる教育実践を目指す」17件、そして、病院の職員と学校の職員がお互いに理解しあえることにより実習の受け入れがよくなり、実習が円滑になるという「実習しやすい環境を整える」14件、お互いの情報を交換し合うことで事情がわかり人間関係を築きやすくなるという「お互いを理解し、人間関係がよくなる」14件、双方の質の向上といった「一緒に学び共に向上したい」11件、学校の状況を理解してもらいたい、教育を理解してもらいたいという「学校の教育を理解してほしい」8件であった。

表1 人事交流を望む理由(内容分析結果)

カテゴリ	サブカテゴリ	具体例
臨場感あふれる教育実践を目指す (17件)	臨床の知識・技術を取り入れ活性化を図る	学校が活性化される。若い世代や、臨床経験、現場の新しい医療も教育には大切。病院での実践を授業等に生かしていきたい。知と技の統一を図る。
	学校と病院のことを知っている	双方をよく知った人材が増える。 臨床での経験や学校での経験が必要。
	教員の実践能力の向上	学校も(新しい)臨床を知らないと困る。自己評価・自己点検につながる。教員も実践者であると考え。臨床現場の知識や看護の目指すものがリアルに伝わる指導。
実習しやすい環境を整える (14件)	学生が実習で学びやすくなる	お互いに理解を深めることにより、学生も学びやすくなる。 学生の実習も充実する。実習もやりやすくなるし協力してもらえる。
	実習の受け入れが良くなる	学生の実習受け入れが良くなる。 協力を得られやすい。よりよい方法を考えられる。 実習の受け入れや教員と指導者・管理者が話しやすくなるのでは。
	お互いが実習指導をしやすい	指導に役立ててもらえる。学生の実習・指導がやりやすい。円滑に実習指導ができるようにするため。
お互いを理解し、人間関係がよくなる (14件)	良好な人間関係を築く	良好な関係作り。人事交流や情報交換をすることにより情報の共有ができ、人間関係も築きやすくなる。話しやすい。
	相互理解	お互いの事情がわかること。
	情報の交換と共有	人事交流や情報交換をすることにより情報の共有ができる。新しい情報をもたらえるため。情報交換。
一緒に学び共に向上したい (11件)	お互いに協力する	お互いに協力し合っていくことが大切。
	一緒に向上したい	一緒に同じ団体、職場の仲間としていろいろ考えていきたい。看護と一緒に学びたい。新人の教育と一緒にやりたい。
	双方の教育力・質向上	双方の教育力アップ。双方の質向上、看護と教育の質向上。
	臨床のレベルアップ	病院の看護のレベルアップ。
学校の教育を理解してほしい (8件)	学校の状況を知ってほしい	学校の状況にも関心を持ってもらいたい。現場のナースに学校の状況を理解してほしい。学校の大変さも知ってほしい。
	興味を持って欲しい	病院が看護に興味を持てる。
	教育を理解してほしい	教育のレベルの理解。病院スタッフの中には学生への教育的かわりを理解されていない。
	教員を知ってもらおう	学校の教員その存在をPRする。

3) 教員の実習病棟とのつながり



実習期間外に病棟へ出入りしている教員は19人(32.2%)だった。そのうち場所は、「実習病棟」が62%と最も多く、実習期間外にも実習病棟へ出入りしている割合が高かった。

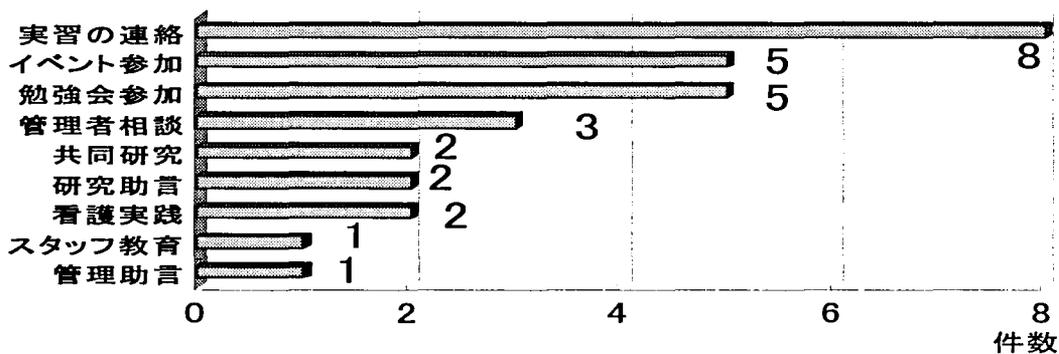


図 実習期間外の病棟の出入り: 病棟で行っている内容 (複数回答)

実習期間外に病棟で行っている内容は、多い順に「実習に関する連絡、打ち合わせ」8人、「イベントへの参加」5人、「勉強会への参加」5人、「看護管理者の相談相手になる」3人、「研究を一緒に行う」2人、「病棟の看護研究の助言」2人、「看護実践」2人であった。

実習期間外にも実習のことについて連絡し、調整をする時間を作っていることがわかる。

表2 良好な関係作りのために教員が行っていること

カテゴリ	件数	サブカテゴリ
積極的なコミュニケーションを通して、何でも話せる関係をつくる	30 件	1) いろいろな場面でスタッフ、指導者、師長とよく話をする(23 件) 2) 誠意を表す(5 件) 3) 病棟スタッフの意見を聞くようにしている(2 件)
学生の反応や指導に関する話し合いの結果を指導に反映させていく	19 件	1) 学生の反応を伝える(8 件) 2) 教育的に関わる(7 件) 3) 指導の話し合いをする(4 件)
円滑な実習運営のために調整をする	11 件	1) 実習の積極的な準備をする(3 件) 2) 指導をふまえ、学生の情報を伝える(2 件) 3) 指導の依頼や調整をする(2 件) 4) 役割を明確にする(2 件) 5) 情報伝達を徹底する(2 件)
臨床にお任せしないで指導に関わる	6 件	1) 臨床にお任せにしないで指導に関わる(6 件)
要望に応え、協力を惜しまない	5 件	1) いろんな場面で協力する(3 件) 2) 業務を手助けする(1 件) 3) 出しゃばらないようにする(1 件)

良好な関係作りのために教員が行っていることについて、自由記述で回答を求めた。その結果を内容分析によりまとめたものが表 2 である。71 件の内容が抽出され、5 つのカテゴリに整理することができた。

各々のカテゴリを紹介していくと、ひとつは「積極的なコミュニケーションを通して、何でも話せる関係をつくる」30 件、続いて「学生の反応や指導に関する話し合いの結果を指導に反映させていく」19 件、「円滑な実習運営のために調整をする」11 件、「臨床にお任せしないで指導に関わる」6 件、「要望に応え、協力を惜しまない」5 件であった。

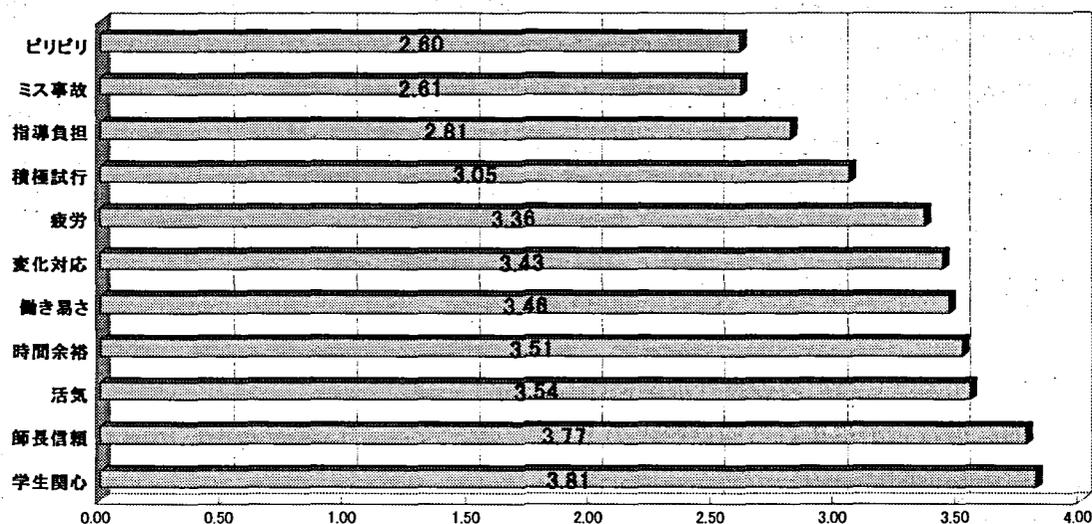
#### 4) 教員からみた実習病棟の状況

次の図は、教員からみた実習病棟の状況についての回答である。“思わない”を 1 として“どちらともいえない”を 3 とし、“思う”を 5 とした 5 段階で回答を得た。

教員の目には実習病棟の状況は「学生への関心」平均値 3.81、「スタッフは師長を信頼している」3.77 と高く、比較的 student への関心が高く師長のリーダーシップのもと信頼して看護を行っているように映っているようだ。また、「緊張感によりスタッフがピリピリしている」平均値 2.60、「ミスや事故が起きないことだけに注意が払われている」平均値 2.61 などの

結果から比較的、病棟内は過度の緊張感が漂うこともなくスタッフは穏やかで、最低限の事故防止に気を取られているわけではなく、全体的に落ち着いた雰囲気であると教員の目には映っているようである。

図 教員からみた実習病棟の状況(項目ごとの平均値)



#### 4. 考察

以上の結果から視点を2点に絞って考察する。

##### 1) 実習病院と学校との人事交流のあり方

病院附属の看護学校の場合、設置が同じ施設間の関係であるため人事交流の機会が多いと予測していた。案の定、人事交流の機会は非常に多く、様々な機会を通じて交流を図っていた。設置主体が同じであること故の交流の機会としては、「年中行事への参加」「懇親会・親睦会への参加」「会議・委員会への参加」などがあげられる。定例の行事、イベントごとは設置主体が同じであれば、やはり合同で行うことが多いであろう。また、「研修会・勉強会への参加」についても非常に多くの指摘がされ、一緒に学ぶ機会が多くあることが推察される。このことは同じ問題意識を持つことや目的達成のために必要な知識や技術を共有することなどが求められる結果であるとも言える。

このような交流について、専門学校の教員の殆どが必要を感じていた。その理由も同じ設置主体である組織の仲間であると言う意識ばかりでなく、「教員として実習の受け入れが良くなり実習が円滑に行えるようになるから」、「教員が看護実践者として臨床を知っていることが重要であるから」と考えていた。これ以外にも「学校の状況を理解してもらう、教員のことを知ってもらうため」という理由も挙げられており、さまざまな人事交流の機会を使って、関係づくりをする必要があるととらえていることがわかった。

このことは、看護学教育在り方検討会でも指摘されていることで、「看護学は実践の科学であるので、教授・助教授・助手を含めて教員には、看護実践の能力が問われる。(中略)常に実践能力を向上させるシステムを作る必要がある。実践の場との人事交流など条件整備が必要である。」と言われている(看護学教育在り方に関する検討会報告書 2002)。

以上のことから、組織的なつながりがあると思われる病院附属の看護学校の教員でさえも、病院と学校との関係が良くなるように、また、実習が円滑に運ぶように、人事交流の機会を有効に活用しているという現状であることがわかった。本学のように組織的なつながりがほとんどない実習施設と関係をつくっていくには、人事交流という機会がないが故に、相当の努力が必要であることが推察される。また、実習の受け入れが円滑になるための関係づくりであったとしても、実習という機会のみ限定せず、研究会や勉強会など一緒に活動する機会や場を意図的につくって、情報交換をしたり話し合ったりしてお互いを知ることが関係づくりの在り方として重要ではないかと考える。基本的な信頼感が双方に生まれるような関わりが求められるだろう。

## 2) 実習を充実させるための良好な関係作りに向けて

基本的な信頼感が生まれる関係をどのようにしてつくっていったらよいのであろうか。それには、短期間に集中して何かを成すというよりも、おそらく専門学校の教員が地道に行っているような様々な機会を通して、繰り返し関係を持つことが必要となるであろう。お互いが理解をして、信頼感をもてる関係は、表面的なつきあいでは成り立たない。専門学校の教員が良好な関係づくりのために行っていることとして「よく話す」「よく聞く」「誠意を表す」「お任せにしない」「いろんな場面で協力する」など具体的な内容が指摘された。

そこから見えてくる重要な要素としては、相手の立場を理解すること、そして、自分の立場を伝え、よく聞きよく話すことがあげられる。そして、このような行動を実習中のみでなく、実習期間外に研究や勉強会などの機会を活用して継続的に行っていることがあげられる。これらの専門学校の教員の意見から得た示唆を基本的な信頼感を得るための行動指針として、今後、実習病院の職員との関係づくりに活かしていくことが望まれる。

### Ⅲ 本学と実習施設との連携のための試み

これまでに行った調査結果をふまえ、実習施設と本学との間の関係作りの方策を検討し、いくつか試みたので、ここに報告する。

#### 1. 看護サマーセミナーでの活動

本学に対してのニーズ調査の結果から、実習病院の看護職者は本学への興味や関心はもっているが、本学に気軽に出入りするような機会は多くない。図書館の土曜日開放が部分的に始まってはいるが、現状では年 1 回行われる看護職者向けの公開講座が主なもので、他には各看護各講座が独自に開催している勉強会・研修会がある。各看護学講座が開催するものはその領域に特化したものであるという傾向がある。したがって、本学のことをもっと知る機会、もっと気軽に本学に出入りする機会にはなっていない。

そこで、平成 16 年（2004 年）から開催されている看護サマーセミナーを活用して、実習病院の看護職者へ参加を促した。もともと上伊那地域の潜在看護職者への学習の機会として始まったセミナーであったが、せっかくの機会であるので多くの看護職に来てもらい活用してもらえるよう対象を広げた。また、セミナーの内容についても大学で受けてみたい授業という問の回答から「カウンセリング」「心理学」の内容を入れ、「最新の治療学」「最新の薬理知識」など指摘の多かった内容を考慮して、セミナーの内容を組み立てた。

セミナーは看護職者への情報提供の機会になるだけでなく、本学のことを知ってもらう機会にもなるため、本学に多彩な教員がいることを伝えるためにも同じ講師ばかりでなく、新しい教員にも協力を願って開催した。平成 18 年度(2007 年)のプログラムは資料を参照していただきたい。

#### 2. 実習期間外に行う実習施設での教員の研修

実習期間外に行われている実習場での研修は、実習が始まる前に準備のための研修として行われているのが殆どである。したがって、実習が終わってしまうと、実習施設に出入りすることは本学の教員の場合まれである。一部、実習の反省やまとめのためであったり、臨床のスタッフと共同研究したりしている場合を除くとほとんどない。

そのため、今回の病院附属専門学校の教員の調査結果を参考にして、実習病院に出入りする機会を増やそうと考えた。継続的に出入りできる方がなお良いため、共同研究を始め

ることや勉強会の企画なども案としてはあったが、本学の教員の希望や都合を押しつけることになりはしないかという懸念もあり、最も可能性があるところから始めようということになった。その方策として、実習が終了した後も定期的（1-2回/月）程度実習施設に臨床研修ということで出入りすることを考えた。

平成18年度は、本務の様々な事情から実績としては満足に実習施設での定期的な研修ができなかったが、今後は年間計画の中に組み入れて進めていきたいと考えている。

### 3. 大学の授業への参加の勧誘

本学に対してのニーズ調査の結果から、本学への興味・関心として「大学の授業への参加」があげられた。「科目等履修生制度の利用」については、職場の制約もあるためか関心は低かった。したがって、職場の都合を調整しやすくするために、自分の興味・関心がある授業に一部であっても参加できるという形式であれば、実習施設の看護職のみなさんに本学の授業へ参加してもらえるのではないかと考えた。

提供する授業については、担当者との交渉も必要なため研究者が関係する科目から始めてみることにした。また、実習指導に直接関係する内容であることや学生の反応がはっきり見えやすい授業であることが望ましいと考え、「基礎看護方法」と「生活援助演習」の2科目を提供科目として選択し、担当教員の協力を得た。

この2科目について、いつどのような内容が講義・演習されるのかわかるようにスケジュールを提示し、A実習病院の看護部長を通じて、実習指導者会で本学の授業への参加を募った。結果としては、「排尿障害のある患者への看護:導尿」の単元への参加の申し出が実習指導者1人からあったが、当日になって都合が悪くなり実現しなかった。

この試みは初めてのことであったが、実習指導者からの反応もあったので、可能な限りしばらく続けてみるのが重要ではないかと思われる。他の教員の協力が得られれば、提供できる科目も増えるので、可能性はもっと高まるのではないかと考える。

## 引用文献

平成 11 年度看護学教育ワークショップ報告書(1999)：看護系大学における大学と実践の場の連携と共働.

看護学教育の在り方に関する検討会報告(2002)：大学における看護実践能力の育成の充実に向けて. 22,27.

小松美穂子(1996)：看護教育と看護サービスの統合. インターナショナル ナーシング レビュー, 日本看護協会出版会, 19(2), 8-12.

森内みね子・高橋久美・若林健ほか(2005)：質の高い看護人材の養成をめざして－神奈川県立の看護専門学校の再編整備. 看護教育, 46(4), 270-275.

佐藤和子・市橋麻由美・八ツ橋のぞみほか(2005)：特色ある学校づくりの一環としてのユニフィケーション－神奈川県立よこはま看護専門学校の場合. 看護教育, 46(4), 276-282.

おわりに

看護教育の大学化が進み、平成 19 年 4 月現在、看護系大学は 157 校といわれている。10 年前の約 3 倍の数になった。このような急速な大学化とともに、大学における看護基礎教育の質の維持・向上が課題となっている。平成 14 年、平成 16 年と続けて看護学教育の在り方に関する検討会報告が出されているが、この中でも「看護学の学士課程教育における看護実践能力の育成」に焦点を当てた報告、提言がされている。

看護基礎教育のなかで、看護実践能力を備えた質の高い看護職の育成のためには、看護学実習（臨地実習）の充実が不可欠である。実習の環境作りの視点から実習が充実するためにどのような課題があるか考えてみると、ひとつには教員や実習指導者の質の確保といった指導者の課題があり、もう一つには実習施設が実習場として十分な看護の質を備えていることといった実践の場の課題があり、最後に実習施設と教育機関が（大学）が連携して実習指導の体制が整備されることといった実習施設と大学との連携の課題があげられる。最後の連携の課題について、今回の研究で取り上げたのであるが、連携の必要性についてはいぶん前から指摘されており、看護学実習が充実する上で実習施設と大学が連携することは双方十分意識していることである。しかし、連携していくための具体的な手だてがハッキリしていないことと、連携ができたことの証が示しにくい、すなわち連携の評価ができないことのために連携の形が見えないままではいると思われる。

実習施設と大学が連携していくための手だてを見つけるために 2 つの調査を行い、具体策を立てて取り組み始めたところであるが、この研究をして思うのは、連携のための具体策には制度という組織間の約束・規定によって示される形、例えばユニフィケーションシステムや臨床教授制度、教員の臨床研修制度などがある。いっぽうで、連携のための具体策にはお互いの顔が見える人間と人間のつながりをつくるという形にはなかなか示せないものがある。それはすなわち、共働できる人間関係（信頼関係）であるが、これが制度とともに築かれていることが必要である。この信頼関係形成のために重要なのは“相互理解のために情報交換する”ことと“看護を考える活動と一緒に行動”ことであると今回の研究で示唆を得たように思う。そして、その方策として取り組んだ具体的活動である「看護サマーセミナー」や「教員の臨床での研修」や「大学の授業の参加（公開）」が今後、継続して行われることが重要であり、この活動が発展して臨床の場における共同研究や事例検討などの活動につながっていくことを期待している。

# 資 料

資料1：第16回日本看護学教育学会抄録・ポスター原稿

資料2：第26回日本看護科学学会抄録・ポスター原稿

資料3：平成18年度長野県看護大学研究集会抄録・発表スライド

資料4：実習病院の看護職者への調査の依頼文と調査用紙

資料5：調査結果報告資料(協力病院へ結果として示した資料)

資料6：病院附属看護専門学校の教員への調査依頼文と調査用紙

資料7：第4回看護サマーセミナーチラシ

## 病院と学校との良好な関係作りのために教員が行う 実習病棟での活動

○唐澤由美子, 中村恵, 武田貴美子, 曾根千賀子, 岩崎朗子  
(長野県看護大学)

### はじめに

看護学実習をより充実させるためには、実習病院と学校の連携が重要であると言われている。現在、連携に向けて実習調整会議、事例検討会など具体的な取り組みがなされているが、関係作りのために教員が行っている内容について具体的に示されている報告は少ない。今回、実習病院との良好な関係作りのために教員が行っている活動を明らかにすることを目的に調査を行ったので報告する。

### 方法

対象：A県内の病院附属看護専門学校に勤務する教員全数（9施設、86人）。調査時期：2006年1月25日～2月10日。

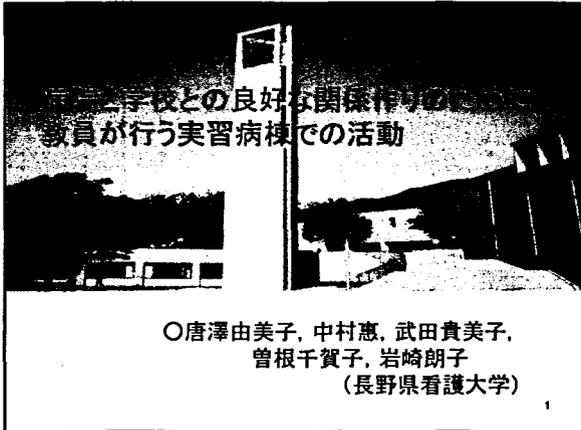
調査方法：自作の質問紙を郵送により施設ごと配付し、個別に返送してもらった。質問紙の内容：①個人の属性、②実習病棟への教員の出入り、③実習病棟で教員が行っていることである。分析方法：記述統計を中心に行い、自由記述に関しては内容分析を行った。倫理的配慮：質問紙の配付に際して、研究の主旨の説明と協力依頼を文面に記し、協力は自由意志によること、質問紙は無記名であり返送は個人で行うこと、個人が特定できないよう収集したデータを取り扱うこと等について依頼文に明記し遵守した。

### 結果

質問紙の回収数は61件で、回収率は71.0%だった。有効回答数はそのうち59件だった。＜個人の属性＞教員経験年数は、1年未満～20年、平均7.5年(SD=5.2)。看護職の経験年数（教員経験除く）は、3年～33年、平均13.3年(SD=6.5)。実習を担当している領域は、基礎21件(35.6%)、成人20件(33.9%)が多く、複数の領域を担当している教員は20件(33.9%)であった。＜病棟とのつながり＞実習期間外に病棟へ出入りしている教員は19件(32.2%)だった。そのうち場所は、「実習病棟」が62%と最も多く、実習期間外にも実習病棟へ出入りしている割合が高かった。実習期間外に病棟で行っている内容は、多い順に「実習に関する連絡、打ち合わせ」8件、「イベントへの参加」5件、「勉強会への参加」5件、「看護管理者の相談相手になる」3件、「研究を一緒に行う」2件、「病棟の看護研究の助言」2件、「看護実践」2件であった。内容分析の結果、実習病棟で良好な関係作りのために教員が行っていることとして「積極的なコミュニケーションを通して、何でも話せる関係を作る」30件、「学生の反応や指導に関する話し合いの結果を指導に反映させる」19件、「円滑な実習運営のために調整をする」11件であった。

### 考察

専門学校の教員は様々な機会を得て実習病棟への出入りをしている。教員は、「病棟のイベント」や「勉強会」や「研究活動」等の機会を使って、実習期間に限らず、実習病棟の人々と関わり、お互いをよく知るための努力をしている。病棟にまめに足を運び、一緒に活動することを関係作りの上で重要視している。



【目的】

看護学実習をより充実させるためには、実習病院と学校の連携が重要であると言われている。

現在、連携に向けて実習調整会議、事例検討会など具体的な取り組みがなされているが、関係作りのために教員が行っている内容について具体的に示されている報告は少ない。

今回、実習病院との良好な関係作りのために教員が行っている活動を明らかにすることを目的に調査を行ったので報告する。

【方法】

- 対象:A県内の病院附属看護専門学校に勤務する教員全数(9施設、86人)。
- 調査時期:2006年1月25日～2月10日。
- 調査方法:自作の質問紙を郵送により施設ごと配付し、個別に返送してもらった。質問紙の内容:①個人の属性、②実習病棟への教員の出入り、③実習病棟で教員が行っていることである。
- 分析方法:記述統計を中心に行い、自由記述に関しては内容分析を行った。
- 倫理的配慮:質問紙の配付に際して、研究の主旨の説明と協力依頼を文面に記し、協力は自由意志によること、質問紙は無記名であり返送は個人で行うこと、個人が特定できないよう収集したデータを取り扱うこと等について依頼文に明記し遵守した。

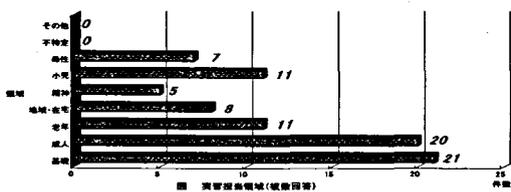
【結果】

- 配付数:86、回収数:61、回収率:71.0%
- 有効回答数:59  
(未記入項目が多かったものを除く)

<個人の属性に関して>

- 年齢:28歳～58歳、平均43.7歳(SD=6.9)
- 教員経験年数:1年未満～20年、平均7.5年(SD=5.2)
- 看護職の経験年数(教員経験除く):3年～33年、平均13.3年(SD=6.5)

<教員が担当している実習領域>



実習を担当している領域は、基礎21件(35.6%)、成人20件(33.9%)が多く、老年11件(18.6%)、小児11件(18.6%)、地域・在宅8件(13.6%)、母性7件(11.9%)、精神5件(8.5%)であった。複数の領域を担当している教員は20件(33.9%)あり、基礎と成人を兼ねている人が9件と多かった。最も兼務が多い人は4領域(基礎、成人、地域・在宅、精神)を担当していた。

<教員が実習を担当する主な診療科>

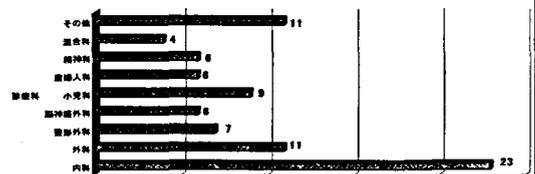
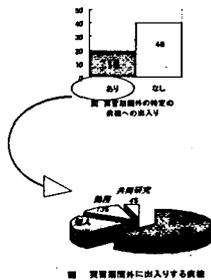


図 担当する実習病棟の主な診療科(複数回答)  
教員が実習を担当する主な診療科は、内科23件(39.0%)で最も多く、外科11件(18.6%)、小児科9件(15.3%)と続く。担当領域として基礎や成人が多いため、内科系外科系の病棟を担当する割合が高い。その他は、訪問看護ステーション、認知症病棟、リハビリ病棟、決まっていないなどであった。

<実習病棟とのつながり>



実習期間外に実習病棟へ出入りする教員は19件(32.2%)だった。  
さらに、実習期間外に病棟へ出入りしている教員が行っている場所は、「実習病棟」が最も多く62%、他には、「知人がいる病棟」21%、「以前勤務していた病棟」13%、「共同研究している病棟」4%であった。実習期間外にも実習病棟へ出入りしている割合が高かった。

<実習期間外に行っていること>

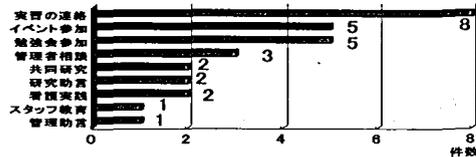


図 実習期間外の病棟の出入り:病棟で行っている内容 (複数回答) n=19

実習期間外に病棟へ出入りしている19人が、病棟で行っていることについては、多い順に「実習に関する連絡、打ち合わせ」18件、「イベントへの参加」5件、「勉強会への参加」5件、「看護管理者の相談相手になる」3件、「研究と一緒にを行う」2件、「病棟の看護研究への助言」2件、「看護実践」2件、「スタッフの教育上の問題について助言する」1件、「看護管理上の問題に助言する」1件であった。その他には、授業の教材を借りるが1件あった。

<実習病棟で良好な関係作りのために教員が行っていること (総数71件)>

- 積極的なコミュニケーションを通して、何でも話せる関係をつくる(30件)
  - 1) いろいろな場面でスタッフ、指導者、師長とよく話をする(23件)
  - 2) 誠意を表す(5件)
  - 3) 病棟スタッフの意見を聞くようにしている(2件)
- 学生の反応や指導に関する話し合いの結果を指導に反映させていく(19件)
  - 1) 学生の反応を伝える(8件)
  - 2) 教育的に関わる(7件)
  - 3) 指導の話し合いをする(4件)

<実習病棟で良好な関係作りのために教員が行っていること (総数71件)>

- 円滑な実習運営のために調整をする(11件)
  - 1) 実習の積極的な準備をする(3件)
  - 2) 指導をふまえ、学生の情報を伝える(2件)
  - 3) 指導の依頼や調整をする(2件)
  - 4) 役割を明確にする(2件)
  - 5) 情報伝達を徹底する(2件)
- 臨床にお任せしないで指導に関わる(6件)
  - 1) 臨床にお任せしないで指導に関わる(6件)
- 要望に応え、協力を惜しまない(5件)
  - 1) いろいろな場面で協力する(3件)
  - 2) 業務を手助けする(1件)
  - 3) 出しやばらないようにする(1件)

【考察】

- 専門学校の教員は、実習指導で病棟に出入りする機会が多いにもかかわらず、実習期間外にも32%が病棟へ出入りしていた。また、実習期間外に病棟で行うこととして「病棟のイベントへの参加」「勉強会への参加」「管理者の相談相手になる」「研究活動を行う」「看護実践を行う」などいろいろな形で病棟に関わっていた。
- 良好な関係作りのために教員が行っていることでは、「密にコミュニケーションをとること」と「学生の実習の反応を伝え活用すること」を重視しており、通常行われる実習の調整、連絡はもとより、できる限りまめに臨床に向き、情報を伝え、話してお互いを知る努力をしている。



専門学校の教員の実習病院への出入りは、様々な機会を使っており、たいへん密である。また、附属施設であるが故に出入りの気軽さ容易さもあるであろう。附属施設をもたない大学の場合、このような様々な機会を捉えて、まめに実習病院・病棟に出入りすることはあまりないと思われる。このようにまめに実習施設に出入りする機会を捉えて一緒に活動することは、関係をつくる上で非常に重要だろう。附属施設をもたない大学の場合、教員は意識して、「勉強会」や「研究活動」や「病棟のイベント」などの機会を得て、実習病院にまめに出入りし、お互いに深く知り合える場面をつくる必要があると考える。

病院と病院附属看護学校との人事交流－実習病院と学校との関係作りへの示唆－

【目的】本研究は、病院附属看護専門学校の教員が病院の職員とどのような人事交流を行っているのか明らかにし、実習病院と学校間との関係作りの方策について示唆を得ることである。

【方法】対象：A県内の病院附属看護専門学校に勤務する教員全数（9施設、86人）。調査時期：2006年1月25日～2月10日。調査方法：自作の質問紙を郵送により施設ごと配付し、個別に返送してもらった。質問紙の内容：①個人の属性、②病院と学校との人事交流の内容と必要とする理由についてである。分析方法：記述統計と自由記述の内容分析を行った。倫理的配慮：研究協力の依頼に際しては、主旨の説明と自由意志による協力、質問紙は無記名であり返送は個人で行うこと、また、個人が特定されないデータの取り扱いを明記しプライバシーの保護を遵守した。

【結果・考察】質問紙の回収数は61件（回収率71.0%）、有効回答数は59件だった。〈個人の属性〉教員経験年数は、1年未満～20年、平均7.5年(SD=5.2)。看護職の経験年数は、3～33年、平均13.3年(SD=6.5)であった。〈人事交流〉学校と病院との人事交流があると答えたのは43名(72.9%)だった。人事交流の内容は、内容分析の結果6カテゴリーが抽出され多い順に「年中行事」への参加32件、「研修会・勉強会」への参加29件、「懇親会・親睦会」への参加11件だった。人事交流が盛んになることを望むと答えた人は48名(81.4%)だった。その理由は、内容分析の結果「臨場感あふれる教育実践を目指す」17件、「実習しやすい環境を整える」14件「お互いを理解し、人間関係がよくなる」14件、「一緒に学び共に向上したい」11件、「学校の教育を理解してほしい」8件であった。以上のことから、病院や学校で定期的に行われる行事や研修などへの参加という人事交流が盛んになることは、双方の理解や知識・技術の向上につながる。また、学生の教育においても協力し合える関係作りに有効であると思われる。

**目的**

- ▶ 病院附属看護専門学校の教員が病院の職員とどのような人事交流を行っているのかを明らかにする。
- ▶ 実習病院と学校間との関係作りの方策について示唆を得る。

**方法**

- ▶ 対象: A県内の病院附属看護専門学校に勤務する教員全数(9施設、86人)
- ▶ 調査時期: 2006年1月25日~2月10日
- ▶ 調査方法: 自作の質問紙を郵送により施設ごと配付し、個別に返送してもらった。
- ▶ 質問紙の内容: ①個人の属性  
②病院と学校との人事交流の機会と必要とする理由
- ▶ 分析方法: 記述統計と自由記述の内容分析を行った。

**結果1: 回収数と属性**

- ▶ 回収数: 61件(回収率71.0%)、うち有効回答数は59件
- ▶ 個人の属性:
  - 教員経験年数  
平均7.5年(SD=5.2) 1年未満~20年
  - 看護職の経験年数(教員経験除く)  
平均13.3年(SD=6.5) 3年~33年

**結果2: 人事交流の機会** N=59

活動	回数
「年中行事」への参加	32件
「研修会・勉強会」への参加	29件
「懇親会・親睦会」への参加	11件
「研究発表・活動」への参加	6件
「実習関係」への参加	6件
「会議・委員会」への参加	5件
「授業・講義」への参加	4件

**人事交流の機会の詳細**

<p><b>懇親会・親睦会 (11件)</b> 例: 新年会、旅行</p> <p><b>研修会・勉強会 (29件)</b> 例: 講演、セミナー、病棟の勉強会</p> <p><b>会議・委員会 (5件)</b></p>	<p><b>年中行事 (32件)</b> 例: 納涼祭、病院祭、入学式、卒業式</p> <p><b>実習関係 (6件)</b> 例: 指導者会、実習報告会、研究発表会、共同研究 (6件)</p>	<p><b>講義・授業 (4件)</b> 例: 公開授業、外来講師</p>
---	---	---

学校主催 (学校主催)

病院主催 (病院主催)

**結果3: 人事交流の必要性** N=59

交流を望む 54(91.5%)

その理由:  
現状でよい  
病棟のスタッフは忙しい  
教育を深めていくには  
異動せず時間をかけることが必要



### 内容分析の詳細

カテゴリー	サブカテゴリー	具体例
臨場感あふれる教育実践を目指す(17件)	臨床の知識・技術を取り入れ活性化を図る	学校が活性化される。若い世代や、臨床経験、現場の新しい医療も教育には大切。病院での実践を授業等に生かしていきたい。臨床を知らない教員が何を教えるのか？知と技の統一を図る。
	学校と病院のことを知っている	双方をよく知った人材が増える。臨床での経験や学校での経験が必要。
	教員の実践能力の向上	学校も(新しい)臨床を知らないで困る。自己評価・自己点検につながる。教員も実践者であるとする。臨床現場の知識や看護の目指すものがリアルに伝わる指導。
実習しやすい環境を整える(14件)	学生が実習で学びやすくなる	お互いに理解を深めることにより、学生も学びやすくなる。学生の实習も充実すると思う。実習もやりやすくなるし協力してもらえ。
	実習の受け入れが良くなる	学生の実習受け入れが良くなる。協力を得られやすい。よりよい方法を考えられる。実習の受け入れや、教員と指導者・管理者が話しやすくなるのではないかな。
	お互いが実習指導をしやすい	指導に役立ててもらえる。学生の指導・実習がやりやすい。円滑に実習指導ができるようにするため。

カテゴリー	サブカテゴリー	具体例
お互いを理解し、人間関係がよくなる(14件)	良好な人間関係を築く	良好な関係作り。人事交流や情報交換をすることにより情報の共有ができ、人間関係も築きやすくなる。話しやすい。
	相互理解	お互いの事情がわかること。
	情報の交換と共有	人事交流や情報交換をすることにより情報の共有ができる。新しい情報をもたらえるため。情報交換。
学校の教育を理解してほしい(8件)	学校の状況を知ってほしい	学校の状況にも関心を持ってもらいたい。現場のナースに学校の状況を理解してほしい。学校の大変さも知ってほしい。現状を打破したい。
	興味を持って欲しい	病院が看護に興味を持つ。
	教育を理解して欲しい	教育のレベルの理解。病院スタッフの中には学生への教育的かわりを理解されていない。
	教員を知ってもらおう	学校の教員その存在をPRする。
一緒に学び共に向上したい(11件)	お互いに協力する	お互いに協力し合っていくことが大切。
	一緒に向上したい	一緒に同じ団体、現場の仲間としてのいろいろ考えていきたい。看護を一緒に学びたい。新人の教育を一緒に行いたい。
	双方の教育力・質向上	双方の教育力アップ。双方の質向上、看護と教育の質向上。
	臨床のレベルアップ	病院の看護のレベルアップ。

### 考察

- ▶ 教員は、病院職員と様々な機会を意図的にとらえて人事交流を行っている。
- ▶ 人事交流が盛んになることは、双方が理解しあい、共に看護の知識・技術を向上することができ、学生の教育においても協力し合えるような関係作りに役立つと教員が考えている。
- ▶ 病院や学校で定期的に行われる行事や研修、慣例となっているイベントは、人が集まる場のみならず顔と顔を合わせる機会となる。これらのイベントへの参加は、お互いが協力し合い交流が深まることに有効であると考えられる。

病院-附属看護学校の関係においても双方が忙しくとも、意図的に、積極的に、行事に参加して、交流することが良好で発展的な関係につながると考える。

## 実習指導における実習施設と大学の連携に関する研究

研究者：唐澤由美子（代表）、中村恵、武田貴美子、岩崎朗子、曾根千賀子

### 【研究目的】

看護学実習は学生の看護実践能力を高める上で、たいへん重要な授業であり、効果的に展開できることが期待されている。そのために必要なのは、大学と実習施設間の交流と柔軟な協力体制である。大学と実習施設が同じ設置主体である場合、ユニフィケーションという体制で連携を容易にしているところもある。しかし、本学の場合、設置主体が同じ施設での実習は限られており、人事交流もなく、情報交換の場も非常に少ない。現在行われていることは、実習を担当する教員（助手）が実習直前に実習施設との調整や情報交換を行って、実習環境を整えているという状況である。

そこで、本研究では実習施設と大学がもっと密接な関係をつくることをめざし、現状の問題点の明確化、対応策の検討を行い、いくつか試行したのでその結果を報告する。

### 【研究計画と成果】

#### <平成 16 年度>

本学の実習病院 5 施設の看護管理者、看護師（実習指導者を含む）477 人を対象に、本学および教員への要望や期待についての意識調査を行った。269 人(56.4%)からの回答が得られ、その結果、看護管理者に比べ看護師は「大学の敷居の高さ」「大学との距離の遠さ」「臨床のやり方を非難されそう」などの印象をもっており、実習病院の看護職者にとって本学はまだまだ身近に感じられない存在であると推測された。

#### <平成 17 年度>

実習病院と学校間の関係作りの示唆を得るために、A 県内病院附属看護学校の看護教員(9 施設 86 人)を対象として、教員が病院の職員とどのような人事交流を行っているかを自作の質問紙にて調査した。その結果、61 人(71.0%)から回答が得られ、ユニフィケーションの体制に類似した病院と附属看護学校の関係において、多くの機会を通じて人事交流を図っていることがわかった。それは、実習期間を問わず年間を通じてなされていた。また、実習を円滑に行う上で人事交流は必要だと教員は認識していた。

#### <平成 18 年度>

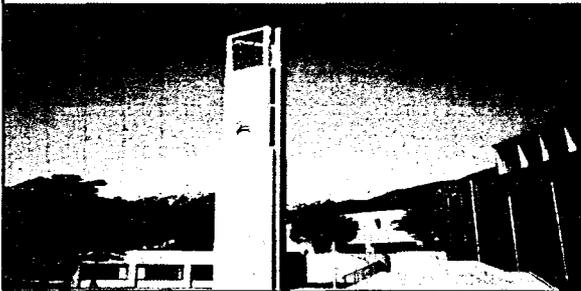
過去 2 年間の調査をふまえて、本学で行える対応策について検討し、次の 3 点について実施してみた。①「看護サマーセミナー」において、魅力ある講義を設定し、実習施設の看護職員の方にも広く声をかけ参加を募った。②実習指導以外にも実習施設へ研修に出かけ、看護管理者や実習指導者の方々と情報交換を行った。③大学で行っている「基礎看護方法Ⅰ」や「生活援助演習Ⅰ」の授業への参加を実習病院の実習指導者を中心に募った。

### 【今後の課題】

今年度の活動は試行してみたという段階で、まだ成果を上げるまでには至っていない。これからも、できるだけ多くの機会を作って、実習施設の看護職員の方々との交流を促進していきたい。また、単発の活動のみでなく、活動を継続していくことが重要なので、活動を定着させる努力が必要である。

### 実習指導における実習施設と大学の連携に関する研究

唐澤由美子、中村恵、武田貴美子、岩崎朗子、曾根千賀子



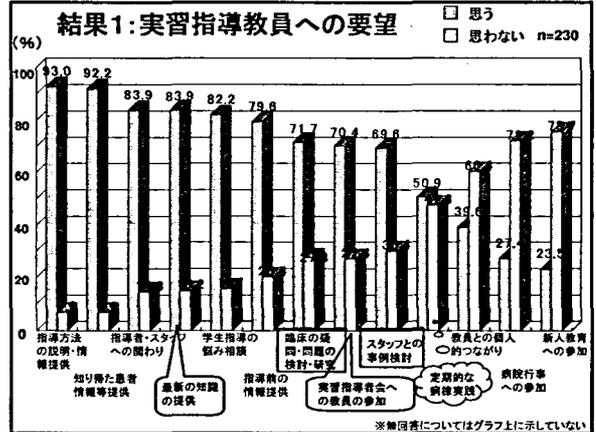
### 研究目的

- 実習指導を充実させるために、実習施設と大学がもっと密接な関係になることを目指し、問題点を明確にして、関係作りに役立つ活動を検討する。
- 関係作りの方策を試行し、評価する。

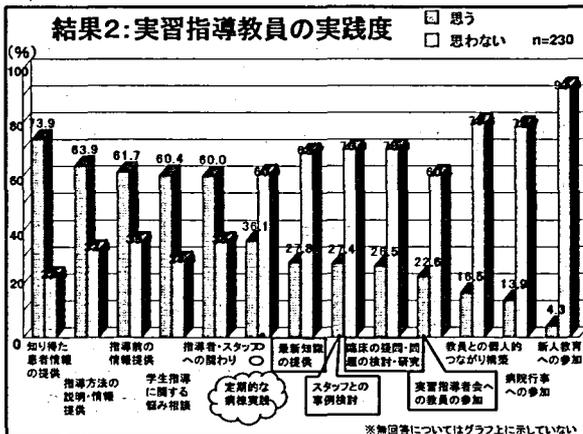
### 活動経過

- 本学、教員への要望や期待について、意識調査を実施
- 対象: 本学の実習病院5施設の看護管理者、看護師(実習指導者を含む)477名
- 時期: 2005年2月
- 方法: 自作の質問紙を郵送にて送付・回収
- 回収状況: 269部(回収率56.4%)
- 有効回答数230部

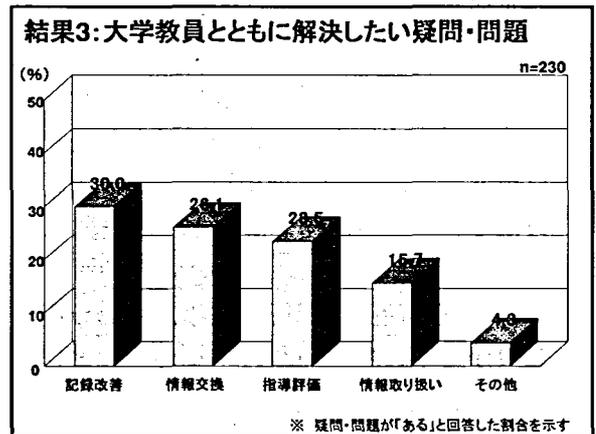
### 結果1: 実習指導教員への要望

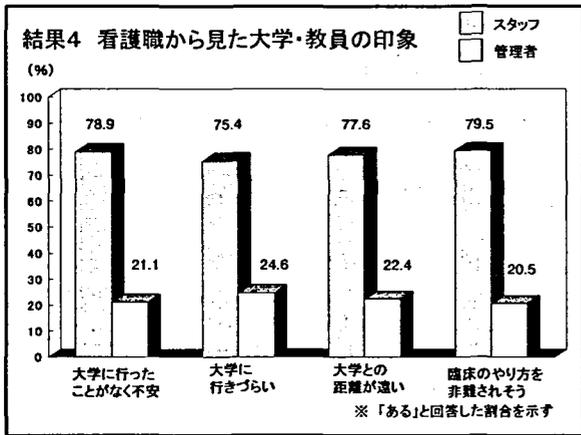


### 結果2: 実習指導教員の実践度



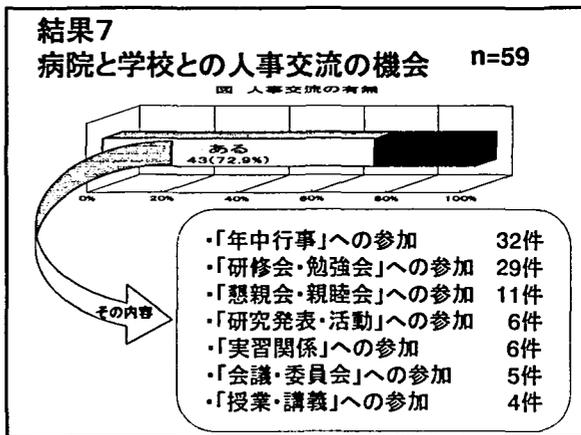
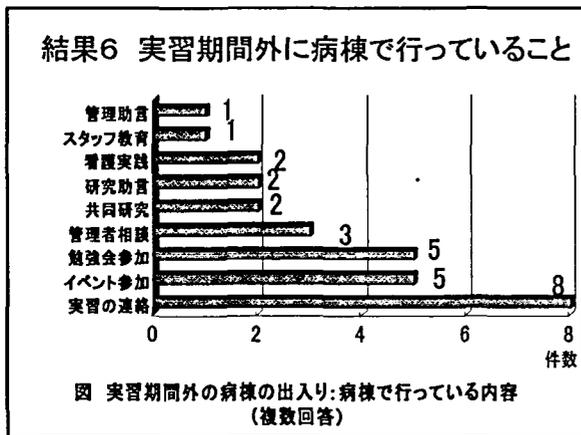
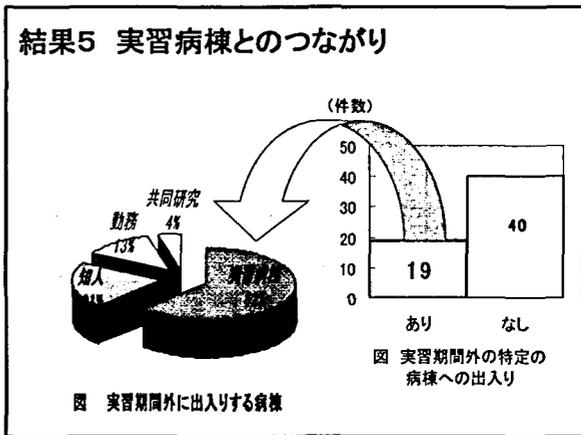
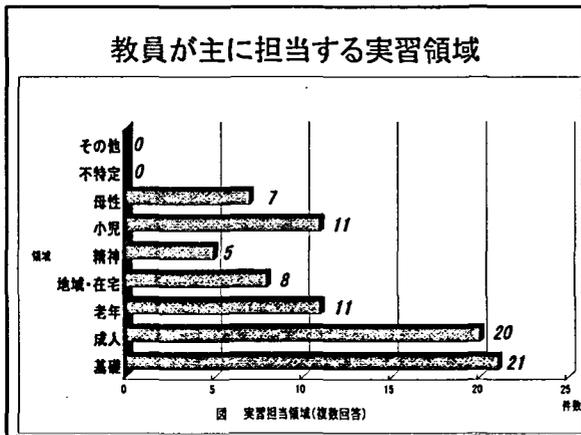
### 結果3: 大学教員とともに解決したい疑問・問題





### 活動経過

- 実習病院と学校との関係作りの示唆を得るための実態調査
- 対象: A県内の病院附属看護学校9施設の看護教員(専任教員)86名
- 時期: 2006年1-2月
- 方法: 自作の質問紙を郵送にて送付・回収
- 回収状況: 回収数61部(回収率71.0%)
- 未記入項目が多い回答を除き、有効回答数59部とした。

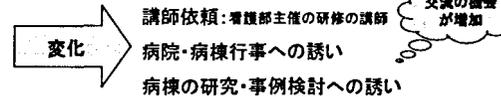


### 現状の問題点

- 実習指導教員の実施度が比較的高いが、要望がそれ以上に高いのは、「指導方法の説明」「患者情報の提供」「指導者・スタッフへの関わり」など実習中の調整・対応が求められている。
- 実習指導教員の実施度が低く、要望が高いのは、「最新知識の提供」「実習指導者会への参加」「臨床での研究」「事例検討」などが求められている。
- 実習期間以外に実習場所へあまり出入りしていないので、交流の機会が少ない。
- 「大学の敷居の高さ」「臨床のやり方を非難されそう」という心理的距離が埋められていない。

### 関係作りの方策

- 「看護サマーセミナー」において、実習病院の看護職との接点を作る。
- 実習指導以外にも実習施設へ研修に行く。
- 学部授業の「基礎看護方法」「生活援助演習」などの授業への参加を実習病院に呼びかける。



### 今後の課題

- 平成18年度は、関係作りの方策を試行した。一定期間実施をして、その活動の評価をする。
- 来年度以降も、継続して活動を行っていくことが重要な課題である。
- 実習指導者と密に関係が取れる方策を練っていく必要がある(実習指導者との合同の研修会が有効だろう)。
- 研究者以外の教員への働きかけも必要。

## アンケートへのご協力をお願い

日頃より、本学の教育・研究に対してご理解とご支援・ご協力を賜り、心より感謝申し上げます。このたび、「実習施設の看護職のみなさまが、本学（実習指導教員）に対してどのような期待をされているか、実習を受け入れている臨床の立場からニーズを明らかにして、今後の実習施設と大学の連携に役立てる。」ことを目的にして調査を実施したいと考えておりますので、ぜひご協力を賜りたくお願い申し上げます。

ご回答にはおおよそ 20 分程度を要します。無記名式であり、さらに、回答は統計的に処理致しますので、個人が特定されることはありません。調査にご協力をいただいたことによる直接の利益はありませんが、頂いた結果は、本学の研究集会（3月を予定）を通じて広く公表し、実習施設と大学の連携について示唆を与えるものと期待しております。もちろん、調査にご協力を得られるかどうかの判断は、皆様の自由な意思が尊重され、協力が得られなくても、何ら不利益を被ることはありません。

お忙しいところ大変恐縮ではございますが、研究の趣旨をご理解いただき、是非ともご協力賜りますよう、お願い申し上げます。

調査及びアンケートについてのご質問、ご意見等ございましたら、下欄宛までご連絡ください。

記入されたアンケート用紙は、同封の返信用封筒にて、2月21日までにご返送ください。

## 研究者氏名

長野県看護大学 唐澤由美子(研究代表者)

中村恵、武田貴美子、曾根千賀子

## 本調査に関する問い合わせ

長野県看護大学看護学部 唐澤 由美子

【連絡先】〒399-4117 長野県駒ヶ根市赤穂 1964

電話&ファックス:0265-81-\*\*\*\*\*

電子メール:\*\*\*\*\*@nagano-nurs.ac.jp

問1. 実習指導に来ている教員への要望について伺います。次の各項目についてそれぞれ該当する数字に1つだけ○印を付けてください。

	思う 4	やや思う 3	あまり思わない 2	思わない 1
1) 実習指導に入る前に大学や学生の情報を提供する	_ _ _			
2) 実習指導の方法について説明や情報を提供する	_ _ _			
3) 実習中、学生、教員の知り得た患者情報・看護について情報提供する	_ _ _			
4) 学生への関わりについて実習指導者やスタッフへ助言をする	_ _ _			
5) 実習指導者の学生指導に関する悩みについて相談にのる	_ _ _			
6) 実習指導以外に定期的に病棟に来て看護実践を行う	_ _ _			
7) スタッフと一緒にケアについての事例検討を行う	_ _ _			
8) 新人看護師の教育・指導に関わる	_ _ _			
9) 看護に関する最新の知識の提供を行う	_ _ _			
10) 臨床での疑問、問題についてスタッフと一緒に検討あるいは研究を行う	_ _ _			
11) 教員と個人的な交流・つながり(実習指導以外のことを聞ける)を持つ	_ _ _			
12) 実習病院の実習指導者会へ教員も参加する	_ _ _			
13) 病院の行事(病院祭、看護の日、運動会など)へ参加をする	_ _ _			

問2. その他、教員に対して要望がありましたら、( )内へお書きください。

( )

実習病院の看護職者への質問紙

問3. 実習指導に来ている教員が実際に実施しているかどうか伺います。次の各項目についてそれぞれ該当する数字に1つだけ○印を付けてください。

	している	ややしている	あまりしていない	していない
	4	3	2	1
1) 実習指導に入る前に大学や学生の情報を提供する	_ _ _	_ _ _	_ _ _	_ _ _
2) 実習指導の方法について説明や情報を提供する	_ _ _	_ _ _	_ _ _	_ _ _
3) 実習中、学生、教員の知り得た患者情報・看護について情報提供する	_ _ _	_ _ _	_ _ _	_ _ _
4) 学生への関わりについて実習指導者やスタッフへ助言をする	_ _ _	_ _ _	_ _ _	_ _ _
5) 実習指導者の学生指導に関する悩みについて相談にのる	_ _ _	_ _ _	_ _ _	_ _ _
6) 実習指導以外に定期的に病棟に来て看護実践を行う	_ _ _	_ _ _	_ _ _	_ _ _
7) スタッフと一緒にケアについての事例検討を行う	_ _ _	_ _ _	_ _ _	_ _ _
8) 新人看護師の教育・指導に関わる	_ _ _	_ _ _	_ _ _	_ _ _
9) 看護に関する最新の知識の提供を行う	_ _ _	_ _ _	_ _ _	_ _ _
10) 臨床での疑問、問題についてスタッフと一緒に検討あるいは研究を行う	_ _ _	_ _ _	_ _ _	_ _ _
11) 教員と個人的な交流・つながり(実習指導以外のことを聞ける)を持つ	_ _ _	_ _ _	_ _ _	_ _ _
12) 実習病院の実習指導者会へ教員も参加する	_ _ _	_ _ _	_ _ _	_ _ _
13) 病院の行事(病院祭、看護の日、運動会など)へ参加をする	_ _ _	_ _ _	_ _ _	_ _ _

実習病院の看護職者への質問紙

問4. 大学教員とともに解決したい臨床上の問題・疑問はありますか？1)～5)の該当する記号に○を付けてください。具体的にあれば( )内にお書きください。

1) 看護記録の改善(看護が見える記録にする、他職種と共有ができる記録にするなど)

( )

2) 看護情報の取り扱い(情報倫理、プライバシーなど)

( )

3) 実習指導の評価、臨地指導者の指導の評価

( )

4) 他施設の看護や実習指導の体制などの情報を交換する機会をもつ

( )

5) その他

( )

問5. 大学への興味や関心について伺います。次の各項目についてそれぞれ該当する数字に1つだけ○印を付けてください。

	思う 4	やや思う 3	あまり思わない 2	思わない 1
1) 教員と個人的に話をしてみたい	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
2) 学部・大学院への入学についての相談をしたい	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
3) 科目等履修生制度を活用してみたい	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
4) 大学図書館の土曜日開放を活用してみたい	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
5) 大学が主催している公開講座へ参加したい	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
6) 大学の授業に参加してみたい	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>

問6. 大学で受けてみたい授業内容がありますか。該当する数字すべてを選んで○を付けてください。その他は( )内に具体的にお書き下さい。

- |               |                |             |
|---------------|----------------|-------------|
| 1. リスクマネジメント  | 2. ストレスマネジメント  | 3. 人事管理     |
| 4. 情報管理       | 5. 現任教育・新人教育   | 6. 心理学      |
| 7. カウンセリング    | 8. 最新の治療学      | 9. 最新の薬理の知識 |
| 10. 運動療法・運動理論 | 11. 医療経済       | 12. 語学・英会話  |
| 13. 統計学       | 14. ヘルスプロモーション | 15. 看護倫理    |
| 16. 看護研究      | 17. 看護技術       | 18. 看護理論    |
| 19. 患者教育      | 20. 在宅ケア論      | 21. 国際看護論   |
| 22. 情報処理      | 23. その他( )     |             |

実習病院の看護職者への質問紙

問7. 大学・教員の印象について伺います。大学との関連でどのような印象をお持ちですか。次の各項目についてそれぞれ該当する数字に1つだけ○印を付けてください。

	思 う	やや 思 う	あ ま り 思 わ な い	思 わ な い
	4	3	2	1
1) 大学と思うと敷居が高い	_ _ _	_ _ _	_ _ _	_ _ _
2) 大学が提供している制度や情報を知らない	_ _ _	_ _ _	_ _ _	_ _ _
3) 大学の情報が自分の目に触れるところがない	_ _ _	_ _ _	_ _ _	_ _ _
4) わざわざ大学に行くのが面倒	_ _ _	_ _ _	_ _ _	_ _ _
5) 大学へ行ったことがないので、何となく不安	_ _ _	_ _ _	_ _ _	_ _ _
6) 顔見知りの人がないので大学へ行きづらい	_ _ _	_ _ _	_ _ _	_ _ _
7) 大学との距離が遠く、なかなか行けない	_ _ _	_ _ _	_ _ _	_ _ _
8) 病院内の研修が忙しく、大学が提供するものまで手を出す余裕がない	_ _ _	_ _ _	_ _ _	_ _ _
9) 恥ずかしいような気がして教員と話がしづらい	_ _ _	_ _ _	_ _ _	_ _ _
10) 教員に臨床のやり方・考え方を非難されはしないかと思う	_ _ _	_ _ _	_ _ _	_ _ _
11) 大学に関心がない	_ _ _	_ _ _	_ _ _	_ _ _
12) 大学・教員に期待していない	_ _ _	_ _ _	_ _ _	_ _ _
13) 大学・教員は臨床への関心が薄い	_ _ _	_ _ _	_ _ _	_ _ _

問8. あなたのことについてお聞きします。  
該当する数字に○印、もしくは数字を記入してください。

- 1) 年齢【       】歳      性別【 1.女性 2.男性 】
- 2) 臨床経験年数(端数は切り捨て) 【       】年
- 3) 実習指導者としての経験年数(端数は切り捨て) 【       】年
- 4) 役職【 1.スタッフ 2.実習指導者 3.主任 4.師長 】
- 5) 専門領域(所属部署)  
【 1.外科(手術室、ICU、救命救急を含む) 2.整形外科 3.脳神経外科 4.内科  
5.小児科 6.産婦人科 7.精神科 8.その他(           ) 】

ご協力ありがとうございました。

### 「実習指導における実習施設と大学の連携に関する研究」

研究代表者: 唐澤由美子  
研究者: 中村恵、武田貴美子、曾根千賀子

#### 研究目的

この研究は3年計画の初年度であり、本学の実習施設となっている病院の看護師の方々の本学あるいは教員への要望、期待について意識調査を行い、関係づくりのための基礎データを得ることとした。

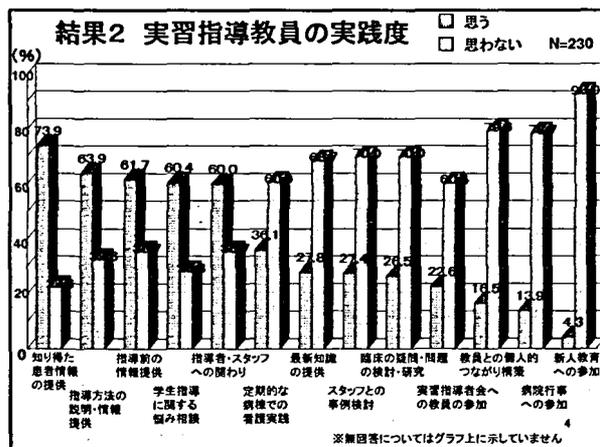
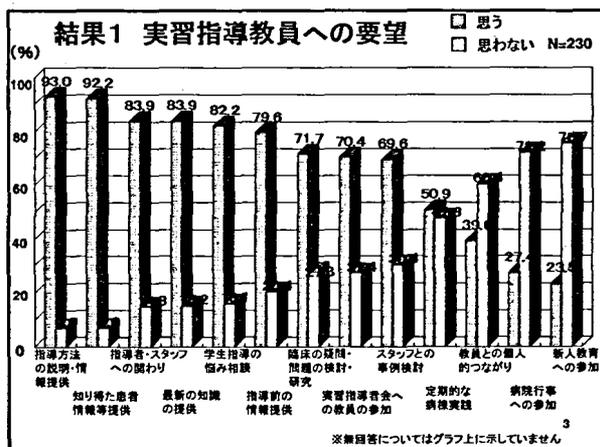
### 研究方法および回収状況

調査は2005年2月に郵送法により5病院477人に対して質問紙を配付し回収した。

質問紙の回収状況は、269部(回収率56.4%)、有効回答数230部(有効回答率85.5%)であった。

回答者の属性は年齢の平均が35.7歳(SD=8.6)、臨床経験年数の平均が12.6年(SD=8.2)で、1年未満から36年と幅広かった。現在の役職は65%がスタッフで、実習指導者が11%、師長・副師長、主任・係長が各10%であった。

主な領域は精神科が最も多く24%、次いで外科が17%、小児科15%、内科13%、脳神経外科10%であった。



**結果1. 2について**

結果1、2より、実習指導教員への要望と実践が高く一致した項目は「実習指導方法の説明・情報提供」「実習中知り得た患者情報等の提供」「学生への関わりに関する指導者・スタッフに対する助言」「学生指導の悩み相談」「最新の知識の提供」であった。実習に関連する項目が多く、関係作りの一助になる重要項目と考えられる。

いっぽうで、「新人教育への参加」「病院行事への参加」「教員との個人的なつながり」については要望も少なく、教員があまり実践していないと指摘された項目である。実習指導教員は、実習指導期間中のみ関わりが主なため、このような結果になったのではないだろうか。

また、要望と実践のギャップが大きい項目は、「最新の知識の提供」「臨床の問題の検討・研究」「実習指導者会への参加」「スタッフとの事例検討」などであった。これらについては、実習指導で築いた関係をさらに発展させるために有益な関わりと考えられる。今後、実施につながる方策を検討していきたい。

**結果3 看護職の教員への要望**

(管理者とスタッフとの比較におけるχ<sup>2</sup>検定結果)

\* p<0.05 有意差あり

- \* 1. 実習指導に入る前に大学や学生の情報を提供する
- 2. 実習指導の方法について説明や情報を提供する
- 3. 実習中、学生、教員の知り得た患者情報・看護について情報提供する
- \* 4. 実習指導者やスタッフの学生への関わりについて助言をする
- 5. 実習指導者の学生指導に関する悩みについて相談にのる
- 6. 実習指導以外に定期的に病棟に来て看護実践を行う
- \* 7. スタッフと一緒にケアについての事例検討を行う
- \* 8. 新人看護師の教育・指導に関わる
- \* 9. 看護に関する最新の知識の提供を行う
- \* 10. 臨床での疑問、問題についてスタッフと一緒に検討あるいは研究を行う
- 11. 教員と個人的な交流・つながり(実習指導以外のことを聞ける)を持つ
- 12. 実習病院の実習指導者会へ教員も参加する
- 13. 病院の行事(病院祭、看護の日、運動会など)へ参加をする

**結果3について**

教員への要望を管理者(主任以上の役職にある者と実習指導者)とスタッフの2群に分けて比較したところ、「実習指導に入る前に大学や学生の情報を提供する」「実習指導者やスタッフの学生への関わりについて助言をする」「スタッフと一緒にケアについての事例検討を行う」「新人看護師の教育・指導に関わる」「看護に関する最新の知識の提供を行う」「臨床での疑問、問題についてスタッフと一緒に検討あるいは研究を行う」の6項目において5%水準にて有意差があった。すなわちこれら6項目について、管理者の方がスタッフより教員への要望が高かった。これらの内容から管理者は看護実践に関するスタッフ全体への指導・助言的な期待を教員に対してもっていると考えられる。

**結果4 看護職から見た教員の実践度**

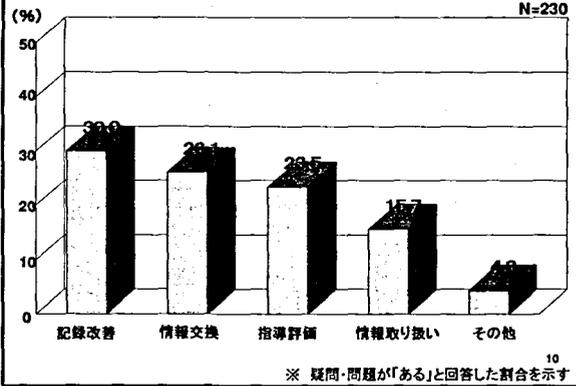
\* p<0.05 有意差あり

- \* 1. 実習指導に入る前に大学や学生の情報を提供する
- \* 2. 実習指導の方法について説明や情報を提供する
- 3. 実習中、学生、教員の知り得た患者情報・看護について情報提供する
- 4. 実習指導者やスタッフの学生への関わりについて助言をする
- 5. 実習指導者の学生指導に関する悩みについて相談にのる
- 6. 実習指導以外に定期的に病棟に来て看護実践を行う
- 7. スタッフと一緒にケアについての事例検討を行う
- 8. 新人看護師の教育・指導に関わる
- 9. 看護に関する最新の知識の提供を行う
- \* 10. 臨床での疑問、問題についてスタッフと一緒に検討あるいは研究を行う
- \* 11. 教員と個人的な交流・つながり(実習指導以外のことを聞ける)を持つ
- 12. 実習病院の実習指導者会へ教員も参加する
- 13. 病院の行事(病院祭、看護の日、運動会など)へ参加をする

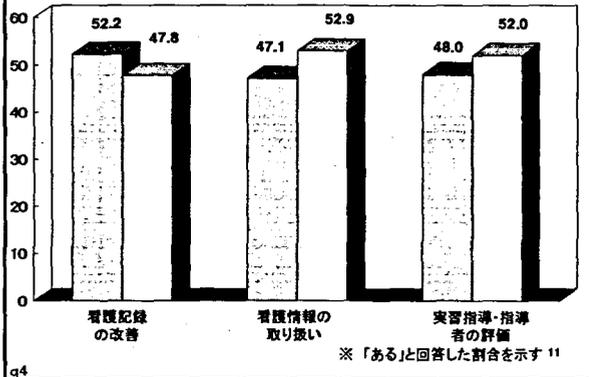
結果4について

教員の実践度については、管理者とスタッフ間の比較で有意差がみられた項目は「実習指導に入る前に大学や学生の情報を提供」「実習指導の方法について説明や情報を提供する」「臨床での疑問、問題についてスタッフと一緒に検討あるいは研究を行う」「教員と個人的な交流・つながり（実習指導以外のことを聞ける）を持つ」の4項目であった。実習指導に関する2項目について、管理者はスタッフよりも教員が実践していると指摘していた。「臨床での問題について一緒に検討」については、管理者はスタッフよりも教員が実施していないと指摘しており、教員に対して臨床の問題への関与を期待していることがわかった。「教員と個人的なつながりをもつ」については、スタッフは管理者よりも教員が実施していないと指摘しており、スタッフと教員との個人的つながりが薄いことがわかった。

結果5 大学教員とともに解決したい疑問・問題



看護職が大学教員とともに解決したい臨床問題・疑問



結果5-1. 看護記録の改善(自由記述内容)

NO	記述内容	役職	領域
1	記録がうまくかけていない現状、教えていただけるとうれしい		精神科
2	彼の意見をとり入れること客観的に評価してもらう事は大切	実習指導者	外科
3	外科病棟にきている先生が記録にクレームしたそうです。うちの病院の記録の書き方をふまえてどう思っているかを教えて欲しい	スタッフ	外科
4	現在の看護記録で臨床に対応できるかを知りたい	実習指導者	精神科
5	記録の量がなかなか出来ていない問題がある(計画にそっていない)	師長・副師長	内科
6	SOAP、あるいはフォーカスチャータリングの指導、クリティカルパスについて	スタッフ	内科
7	リスクにたいえられる看護記録	主任・係長	精神科
8	看護問題のあげ方や、ケア方法のあげ方など、現在の流れについて教えて欲しい	スタッフ	精神科
9	最新のキログ法など教えて欲しい	スタッフ	小児科
10	看護記録のスリム化	主任・係長	内科
11	記録内容もう少し簡単な書き方ができるとよい	スタッフ	精神科
12	電子カルテ導入に向けて不安あり	スタッフ	産婦人科
13	クリティカルパスを導入しているが、パスをおいているのが病棟のみで他職種と共有できていない。いい案があれば、情報を提供していただけたらうれしい	スタッフ	精神科
14	給与も色々もわかっており、より良い記録についても比較できると思うので教えてほしい。(単純なので情報交換が活発でなくそれで良いという雰囲気)	実習指導者	精神科
15	具体的な問題のあげ方、わかる記録	スタッフ	

結果5-2. 実習指導の評価・臨床指導者の指導の評価  
(自由記述内容)

NO	記載内容	役職	領域
1	何ぞのくらいできれば良いのか、評価がむずかしい		精神科
2	学生さんの指導者評価のアンケートを作ってみようと思っている	実習指導者	精神科
3	指導者からの立場だと、指導者の指導の評価をだれがどのようにするのか?	実習指導者	整形外科
4	他者評価は必要	実習指導者	外科
5	指導者・担当者しか評価されていないので、どのように評価されているか知らないで知りたい	スタッフ	精神科
6	学校側の学生に対する方針と、病院側(指導者側)の学生に対する方針について	スタッフ	精神科
7	学生さんが実習前に書く「実習でやりたいこと」(こんなような項目のキロク)を、実習前に見せていただけたら学生さんとかかわりのポイントがわかってよいと思います。(現在は最後の反省会でみせていただいていると思うので、違っていたらすみません)		

13

結果5-3. 看護情報の取り扱い(自由記述内容)

NO	記載内容	役職	領域
1	広いろいろなメンバーで意見交換をすべきだと思う	実習指導者	外科
2	プライバシー保護法が実施されるにあたり、どこまで学生が知ってほしいのかなど	実習指導者	外科
3	患者・家族の同意が大切になってきているが今の最近情報が欲しい。やり方・考え方など	師長・副師長	内科
4	共有できる情報は、機会を持ち、交換していきべきと考える	実習指導者	精神科
5	学生が実習中に得た情報の共有(逆も)	スタッフ	小児科
6	カルテ開示、他職種、他機関との連携での看護としての注目すべきデータの取り扱い	スタッフ	精神科
7	記録の開示むけての注意点、配慮	スタッフ	

14

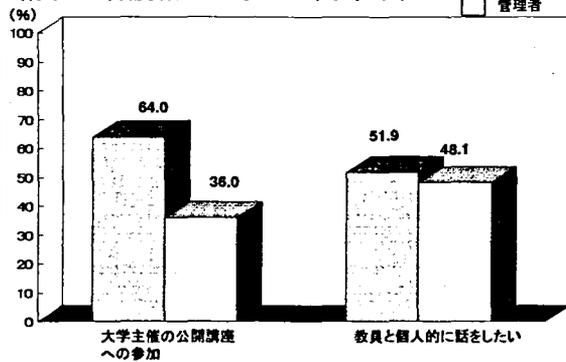
### 結果5について

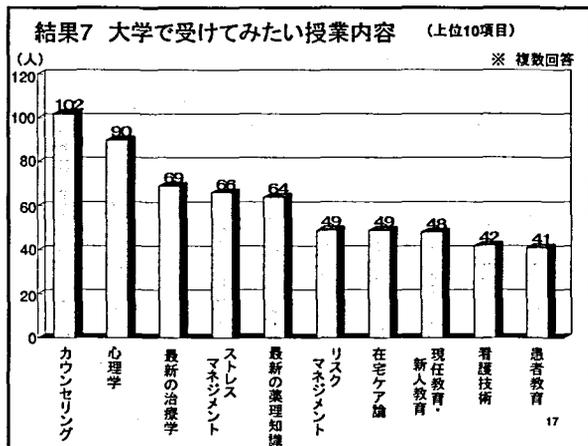
結果5より、教員とともに解決したい問題があるという意見では回答者230人の内「記録の改善」30.0%、「他病院での実習指導体制等の情報交換」26.1%「実習指導の評価」23.5%から挙げられた。また、スタッフと管理者間で比較してみると、スタッフより管理者(主任以上・実習指導者)の関心が高い項目は「情報の取り扱い」「実習指導の評価」であった。一方、スタッフの関心は「記録の改善」にあることがわかった。

具体的に書かれた問題・疑問としては、「看護記録の改善」に関するものが最も多く、15件の意見が寄せられ、「客観的な評価方法」や現在取組中の問題として「電子カルテ」「クリニカルパス」について挙げられていた。また、「SOAP」看護問題が明確でわかりやすく記載される方法なども挙げられた。

これについては、今後、実習指導以外の活動として、教員と臨床の看護師と一緒に検討会を持ったり学習会を持ったりする機会を持つ上での示唆が得られたと考える。このような要望を基に、連携を密にしていけるための活動に反映させていきたい。

### 結果6 看護職の大学への興味・関心





**結果6, 7について**

大学への興味・関心については6割以上のスタッフから「大学の公開講座への参加」が挙げられ、管理者より多く指摘があった。「教員と個人的に話したい」については、管理者もスタッフも約半数が希望していた。

大学で受けてみたい授業としては、回答者201名の集計より、最も指摘が多かった順に「カウンセリング」102件、4「心理学」90件、「最新の治療学」69件、「ストレスマネジメント」66件、「最新の薬理の知識」64件であった。患者のケアに直接役立つ知識や最新の基礎知識について関心が高い結果であった。

「研究」や「語学」や「患者教育」などについては回答者の2割程度でさほど多くなかった。

**総括**

今回の調査で明らかになったことは、実習施設の看護職の方々から教員への要望として多く挙げられたのは「実習指導に関すること」、「最新の看護関係の知識の提供と一緒に臨床の問題を検討すること」であり、実習指導以外での関わりも期待していることがわかった。

管理者の教員への要望とスタッフの教員への要望には異なる点があった。管理者は実習指導関連のみならず、スタッフ全体への臨床上の問題解決の指導・助言等を期待していることがわかった。

教員と一緒に解決したい臨床上の問題や疑問について具体的に挙げられたことは、スタッフからは「記録の改善」について、管理者からは「看護情報の取り扱い」「実習指導の評価」についてであった。これらについて、一緒に考える機会を今後持てるように考えていきたい。また、教員が実習指導に臨床に行った際、声をかけて頂ければ何か始められるのではないかとと思われる。

看護職の方々の大学・教員の印象はまだまだ身近になっていないことがわかった。とくにスタッフの方々には親近感を持って頂けるように関係を作り、大学への出入りがもっと気楽になるよう働きかけが必要だろう。

## アンケートへのご協力のお願い

日頃より、本学の教育・研究に対してご理解とご支援・ご協力を賜り、心より感謝申し上げます。このたび、「実習指導における実習施設と教育機関の連携に関する研究」の一環で、「看護専門学校の先生方が、実習病院（病棟）とどのような関係作りをされておられるか、人事交流も併せてお聞きし、今後の実習施設と教育機関との連携に役立てる。」ことを目的にして調査を実施したいと考えておりますので、ぜひご協力を賜りたくお願い申し上げます。

ご回答にはおよそ 20 分程度を要します。無記名式であり、さらに、回答は統計的に処理致しますので、個人が特定されることはありません。調査にご協力をいただいたことによる直接の利益はありませんが、頂いた結果は、本学の研究集会（3月9日を予定）を通じて広く公表し、実習施設と教育機関との連携について示唆を与えるものと期待しております。もちろん、調査にご協力を得られるかどうかの判断は、皆様の自由な意思が尊重され、協力が得られなくても、何ら不利益を被ることはありません。

お忙しいところ大変恐縮ではございますが、研究の趣旨をご理解いただき、是非ともご協力賜りますよう、お願い申し上げます。

調査及びアンケートについてのご質問、ご意見等ございましたら、下欄宛までご連絡ください。

記入されたアンケート用紙は、同封の返信用封筒にて、2月8日までにご返送ください。なお、クリアホルダーは心ばかりの謝礼です。ご笑納下さい。

### 研究者氏名

長野県看護大学 唐澤由美子(研究代表者)

中村恵、武田貴美子、岩崎朗子、曾根千賀子

### 本調査に関する問い合わせ

長野県看護大学看護学部 唐澤 由美子

【連絡先】〒399-4117 長野県駒ヶ根市赤穂 1964

電話&ファックス:0265-81-\*\*\*\*\*

電子メール:\*\*\*\*\*@nagano-nurs.ac.jp

I. あなたのことについてお答え下さい。該当する記号を選び○をつけ、( )内は具体的に記入下さい。※経験年数については1年未満の期間は切り捨てて下さい。

1. 年齢は 満( )歳
2. 性別は ①女性 ②男性
3. 教員経験は ( )年
4. 看護師経験は ※教員経験年数は除いて下さい※ ( )年
5. 教育歴は ①看護専門学校卒 ②短期大学卒 ③大学卒 ④大学院卒
6. 担当の領域は ①基礎 ②成人 ③老年 ④地域・在宅 ⑤精神  
⑥小児 ⑦母性 ⑧特に決まっていない ⑨その他( )
7. 担当の実習病棟は ①内科 ②外科 ③整形外科 ④脳神経外科 ⑤小児科  
⑥産婦人科 ⑦精神科 ⑧混合科 ⑨その他( )
8. 実習指導は ①教員はラウンドが中心で実習指導者(スタッフ)が殆ど指導する  
②教員が殆ど指導する ③教員と実習指導者の両方で指導する  
④その他( )
9. 病院の病床数は ( )床
10. 病院の設置主体は ①県立 ②市町村(行政組合立を含む) ③日赤  
④厚生連 ⑤国立 ⑥その他( )
11. 勤務している看護学校の課程は ①3年課程 ②2年課程  
③その他( )

II. 病院と看護学校のつながりについてお答え下さい。該当する記号を1つ選び○をつけ、( )内は具体的に記入下さい。

12. 病院から学校へ、学校から病院への人事異動はどのように決められていますか。  
①希望により異動ができる ②定期の異動で命ぜられる(希望は考慮されない)  
③その他( )
13. 病院から学校へ、学校から病院への人事異動の期間は決まっていますか。  
①特に決まっていない  
②決まっている→どのように( )
14. 学校と病院との人事交流はありますか。  
①はい→行事や研修など内容を具体的に( )  
②いいえ
15. あなたは学校と病院の人事交流が盛んになることを望みますか。  
①はい→理由( )  
②いいえ→理由( )
16. あなたは実習期間外に特定の病棟に出入りすることがありますか。  
①ある→どこですか(a 実習病棟 b 知人がいる病棟 c 勤務していた病棟  
d 共同研究している病棟 e その他: )  
②ない

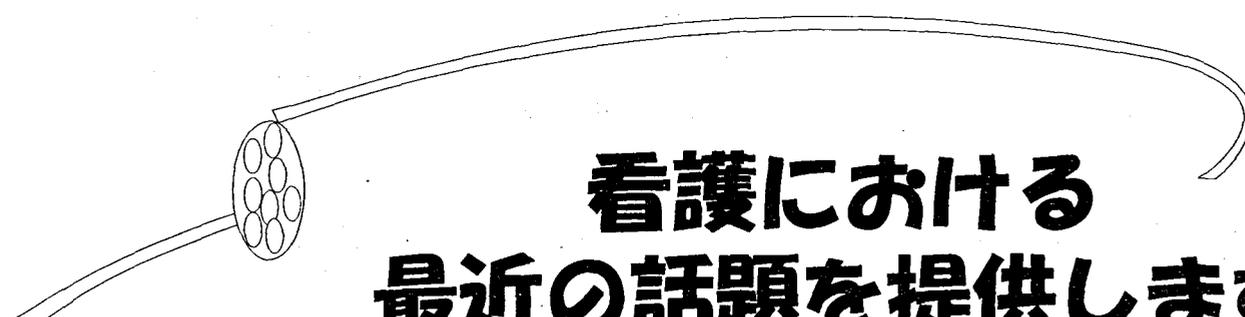


**NCN**  
in  
2006

資料7

# 第4回 看護サマーセミナー in 駒ヶ根

2006年8月8日(火)・9日(水) 午後7時～9時



## 看護における 最近の話題を提供します

お茶を飲みながら、気軽に勉強しましょう！  
他の仲間(看護職)と情報交換しましょう！

8月8日(火)

- ◆ 最近話題の薬：サプリメントの基礎知識  
(長野県看護大学：岩月和彦教授)
- ◆ 看護職者のための話のきき方  
(長野県看護大学：岩崎朗子講師)

8月9日(水)

- ◆ 心の目でものをみる  
(長野県看護大学：江藤裕之助教授)
- ◆ 看護にいかすフィジカルアセスメント  
(長野県看護大学：本田智子助手)

(都合により変更の可能性あり)

会場：長野県看護大学(教育研究棟2階小講義室3)

会費：当日受付時徴収

1日のみ参加 1,000円, 2日間参加 1,500円

(飲み物, 軽食, 資料代等含)

主催：長野県看護大学, 看護サマーセミナー in 駒ヶ根実行委員会

後援：社団法人長野県看護協会, 上伊那医師会

実習指導における実習施設と大学の連携に関する研究

---

発行 平成 19 年 3 月 30 日

研究代表者 唐澤由美子

発行所 長野県看護大学

〒399-4117 長野県駒ヶ根市赤穂 1694

TEL 0265-81-5100 (代表)

印刷 (有) 駒ヶ根印刷